

博 多 131

— 博多遺跡群第 176 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1043 集

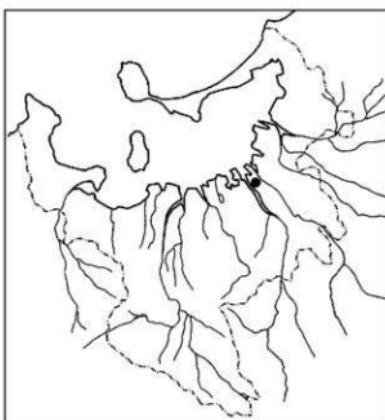
2009

福岡市教育委員会

博 多 131

— 博多遺跡群第 176 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1043 集



遺跡略号 HKT-176

調査番号 0728

2009

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群の発掘調査報告書は事務所ビル建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代末から近世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2009年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

- 本報告書は博多区店屋町135、136の事務所ビル建設に伴って2007年8月16日から11月15日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第176次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 造構・遺物実測、造構・遺物の写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子、平川敬治、名取さつきが、製図は熊谷幸重が担当した。
- 銅錢の分類、銅鏡と鉄製品のX線写真、鍋取手取付金具のレプリカ作成は福岡市埋蔵文化財センターの片多雅樹が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－（2000年）大宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0728	遺跡番号	020127	分布地図番号	天神 49
調査地地番	福岡市博多区店屋町135、136				
開発面積	425m ²	調査面積	207.9m ²	調査原因	事務所ビル建設
調査期間	20070816～20071115		担当者	屋山 洋	

本文目次

I.はじめに	1
II.調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 各調査面と土層の概要	9
3. 遺構と遺物	10
4. 小結	50

挿図目次

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第 2 図 調査地点位置図 1 (1/4,000)	2
第 3 図 調査地点位置図 2 (1/1,000)	3
第 4 図 調査範囲図 (1/200)	4
第 5 図 第 1 面全体図 (1/80)	5
第 6 図 第 2 面全体図 (1/80)	6
第 7 図 第 3 面全体図 (1/80)	7
第 8 図 調査区土層図 (1/60・I 区ベルト土層は 1/30)	8
第 9 図 满実測図 (1/30)	11
第10図 満出土遺物実測図 (1/3)	12
第11図 SE 1045 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	13
第12図 SE 1052 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	14
第13図 SE 1071 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	16
第14図 SE 1073 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	17
第15図 SE 2047・SE 2064 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	18
第16図 SE 2068・SE 2075 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	19
第17図 SE 3043 遺構・遺物実測図・SE 2075 遺物実測図 (1/40・1/3)	20
第18図 土坑実測図 1 (1/30)	21
第19図 土坑実測図 2 (1/30)	22
第20図 土坑実測図 3 (1/30)	23
第21図 土坑実測図 4 (1/40)	24
第22図 土坑実測図 5 (1/40・SK 2067 は 1/80)	25
第23図 土坑出土遺物実測図 1 (1/3)	26
第24図 土坑出土遺物実測図 2 (1/3)	27
第25図 土坑出土遺物実測図 3 (1/3)	29
第26図 土坑出土遺物実測図 4 (1/3)	30
第27図 土坑出土遺物実測図 5 (1/3)	31
第28図 土坑・整地層出土遺物 (1/3)	32
第29図 第 1 ~ 2 面間出土遺物実測図 1 (1/3)	35
第30図 第 1 ~ 2 面間出土遺物実測図 2 (1/3)	36
第31図 第 2 ~ 3 面間出土遺物実測図 (1/3)	37
第32図 第 3 面下出土遺物実測図 (1/3)	38
第33図 包含層出土瓦実測図 (1/3)	39
第34図 出土須恵器実測図 (1/3)	40
第35図 墨書き器 1	42
第36図 墨書き器 2	43
第37図 出土木器実測図 (1/3)	44
第38図 出土銭の透過 X 線画像	47
第39図 金属器実測図	48
第40図 土製鋳型・ガラス小玉実測図	49
第41図 骨角器実測図 (1/2)	53
表 1 墨書き器一覧	41
表 2 遺構別出土銭一覧	46
表 3 銭種別一覧	46
表 4 遺構一覧表	54

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成19年（2007年）4月3日付けて新生紙パルプ商事株式会社代表取締役社長 西村武雄氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市博多区店屋町135、136の事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（19-2-8）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である博多遺跡群の中に位置するため埋蔵文化財第1課では遺構の有無の確認が必要であると判断し、4月19日に重機を使用して確認調査を行った。その結果、現地表面から深さ1.8mまでは地中梁等で破壊されているが、その下には1mほど整地層が残っていることと、護岸の可能性がある石積みを確認した。この調査結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成20年（2008年）8月16日から11月16日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は原因者及び関係者各位の多大なご協力を得た。

2. 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

埋蔵文化財第1課課長 山口譲治

調査係長 米倉秀紀

調査庶務 （前）鈴木由喜（現）古賀とも子（文化財整備課）

調査担当 屋山 洋

作業員 石田和子 岡部安正 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 豊田忠一 中村健三

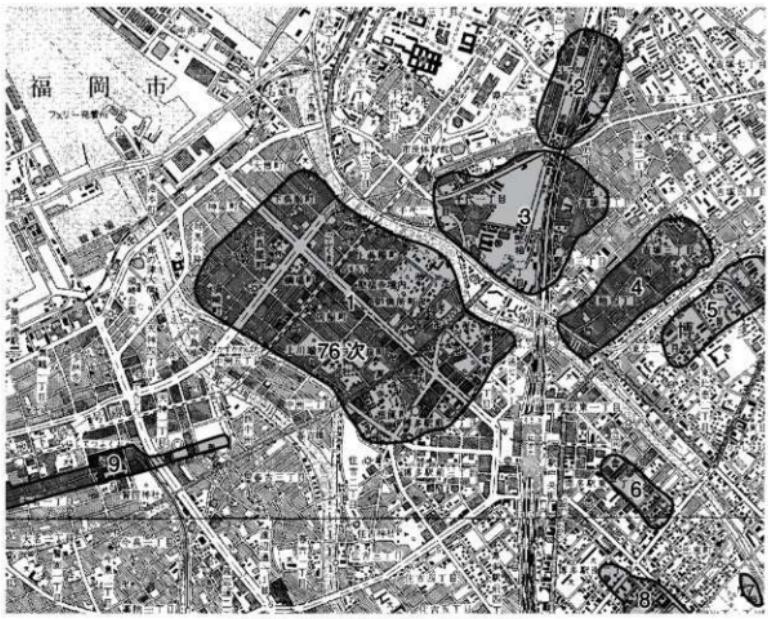
夏秋弘子 西田由喜 前田佳代 水野由美子

整理作業 大石加代子 熊谷幸重 藤野洋子 村上恵子

3. 立地と環境

博多遺跡は那珂川によって運ばれた土砂によって形成された砂丘上に位置する。砂丘は大きく南北2つの砂丘に分かれるが、北側を中世の呼び名をもつて沖ノ浜、南側を便宜上博多濱と呼んでいる。本調査地点が位置する博多濱は古くは弥生時代中期の遺構が確認されており、甕棺墓等も検出されている。古墳時代には博多濱の東南端、現在の地下鉄祇園駅の東側では約56mの前方後円墳が、また周辺には方形の群集墳が築かれている。最近の調査では祇園町の西側の調査地点（142・171・182次）で円筒埴輪が多く出土することから博多濱の南西側にも前方後円墳が存在した可能性がてきた。博多濱にはその後7世紀には鴻臚館の関連施設の可能性がある官衙が今の祇園駅西側を中心に広がっており、その北側には官人達の住居と思われる堅穴式住居群と井戸が検出されている。その後鴻臚館が廃絶すると共に博多濱に中国人商人（綱主）が住み着いて大陸との貿易を担うようになる。

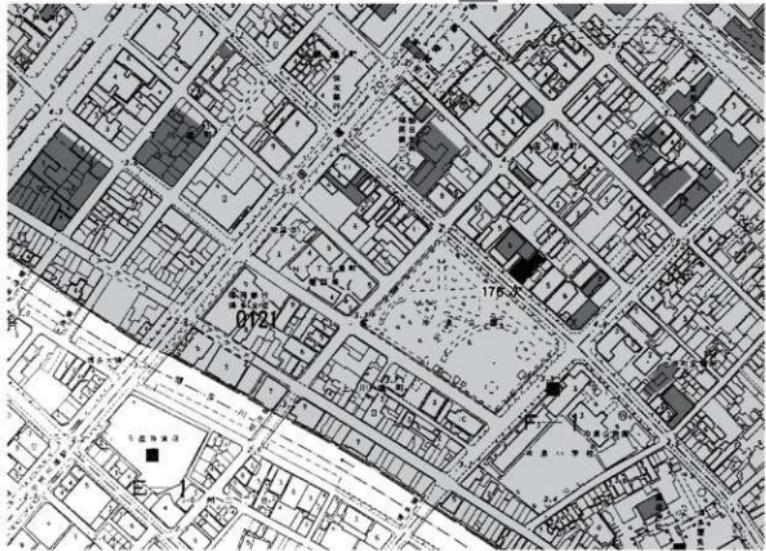
本調査区は博多濱の北西端に位置する。北側隣接地の14次調査では荷揚げ時に船中で割れた不用品を一括廃棄したと思われる白磁溜まりが出土している。また、56次・79次・97次などでは井戸などに焼けた白磁などの一括廃棄が見られるため、12世紀前半期には本調査地点付近に船着き場があり、周辺には荷揚げした土器等を納める倉庫などが立ち並んでいたものと考えられている。



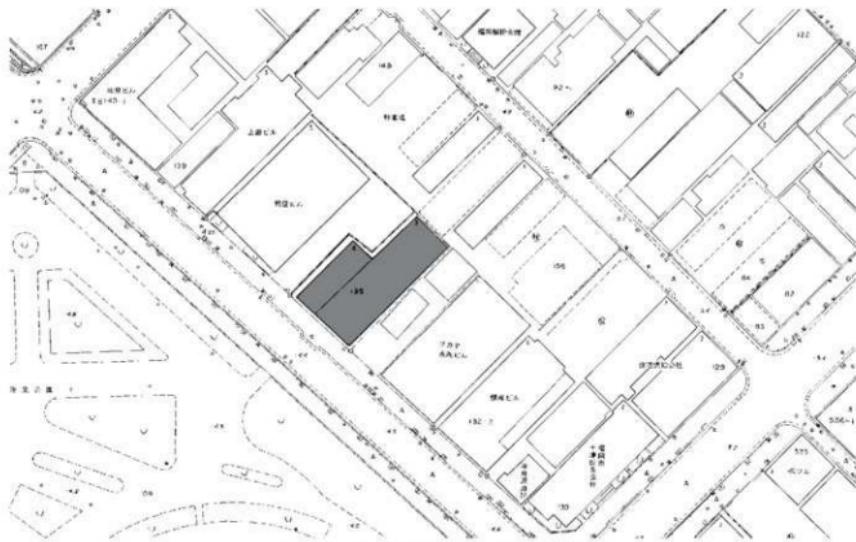
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| 1. 博多遺跡群 | 4. 吉塚遺跡群 | 7. 山王塙棺遺跡 |
| 2. 吉塚本町遺跡群 | 5. 豊遺跡群 | 8. 比恵遺跡群 |
| 3. 積束生産遺跡 | 6. 積束生産遺跡 | 9. 福岡城肥前堀 |

■は博多遺跡群の範囲 (平成 21 年 3 月現在)



第2図 調査地点位置図 1 (1/4,000)



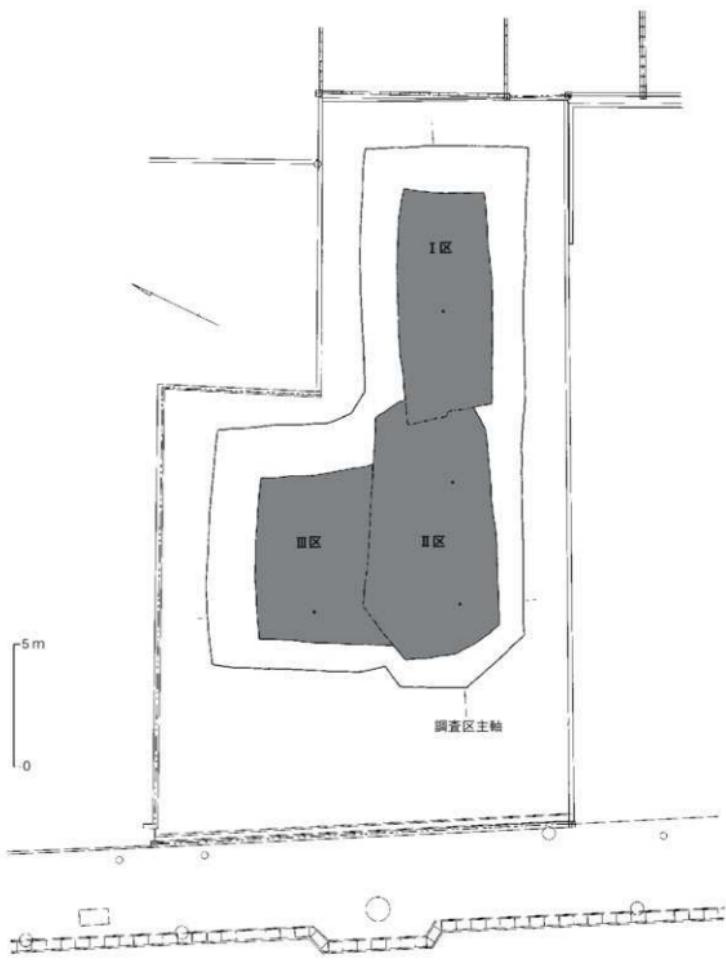
第3図 調査地点位置図2 (1/1,000)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

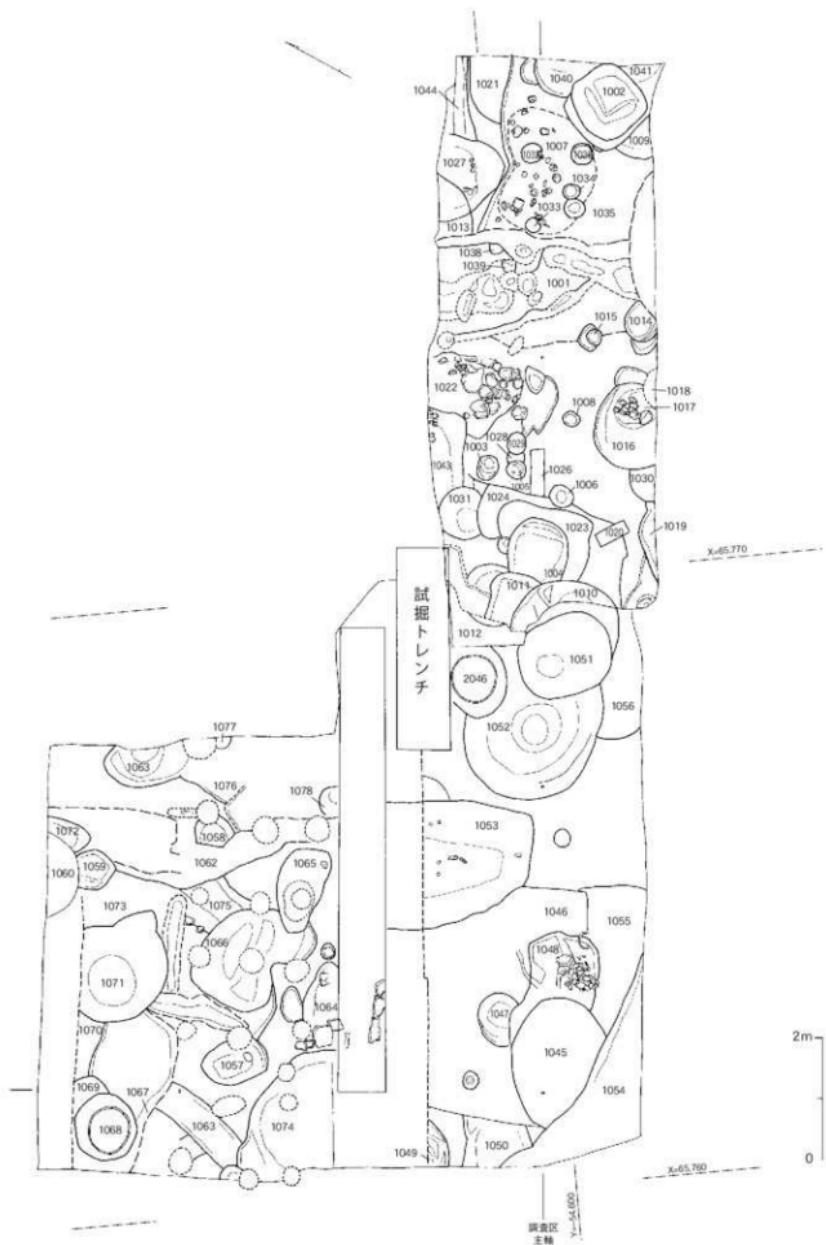
調査開始時は建物解体後の平地で標高4.4～4.6mを測る。現地表面から2mまでは以前の建物基礎により破壊されていたため、重機で標高2.9mまで掘下げ、それから標高1.8mの砂層までの約1.1mを3面に分け、遺構検出を行った。今回の調査では敷地全体が調査対象となるが、調査区の周囲に引きをとったことと調査区西側に入口やユニット置き場等を確保する必要があったことなどから、掘方上面面積で207.9m²にとどまる。発掘調査は廃土置き場の関係上、調査区をI～IIIの3区に分けてI区から調査を行った。I区では1面から2面の間に焼土ブロックを多量に含む整地層を確認したため、その層の下面で一度遺構の精査を行ったが、検出できた遺構は少なかった。また、II・III区では整地層の下は褐色土による埋立て層になっており第3面では遺構を確認することはできなかった。ただIII区では埋立て前の窪み（SX3046）から多量の木片と骨が出土したため、遺構番号を付けて取り上げた。調査は8月1日から開始の予定であったが、北側隣地との境界壁が倒壊する可能性があったため、その倒壊防止工事が終了した後の8月16日から発掘調査を開始した。工程はI区の調査が9月14日まで18・19日に重機での打って返し、II区が9月20日から10月17日まで、19・20日に打って返しを行い22日からIII区の調査を開始した。11月13日に埋め戻しを行い、14日に機材の搬出、15日にユニット等の撤去を行って調査は終了した。

検出した造構は1) 12世紀前半頃と思われる埋立て層とその上の黄褐色整地層、2) 14～16世紀の土坑と井戸群、3) 近世の井戸と土坑群を確認した。1) の時期の埋立て土層の下は海成砂らしき白色粗砂と動植物遺体や土器を含む薄い暗茶褐色土の互層である。黄褐色整地層中では20～30cmごとに遺

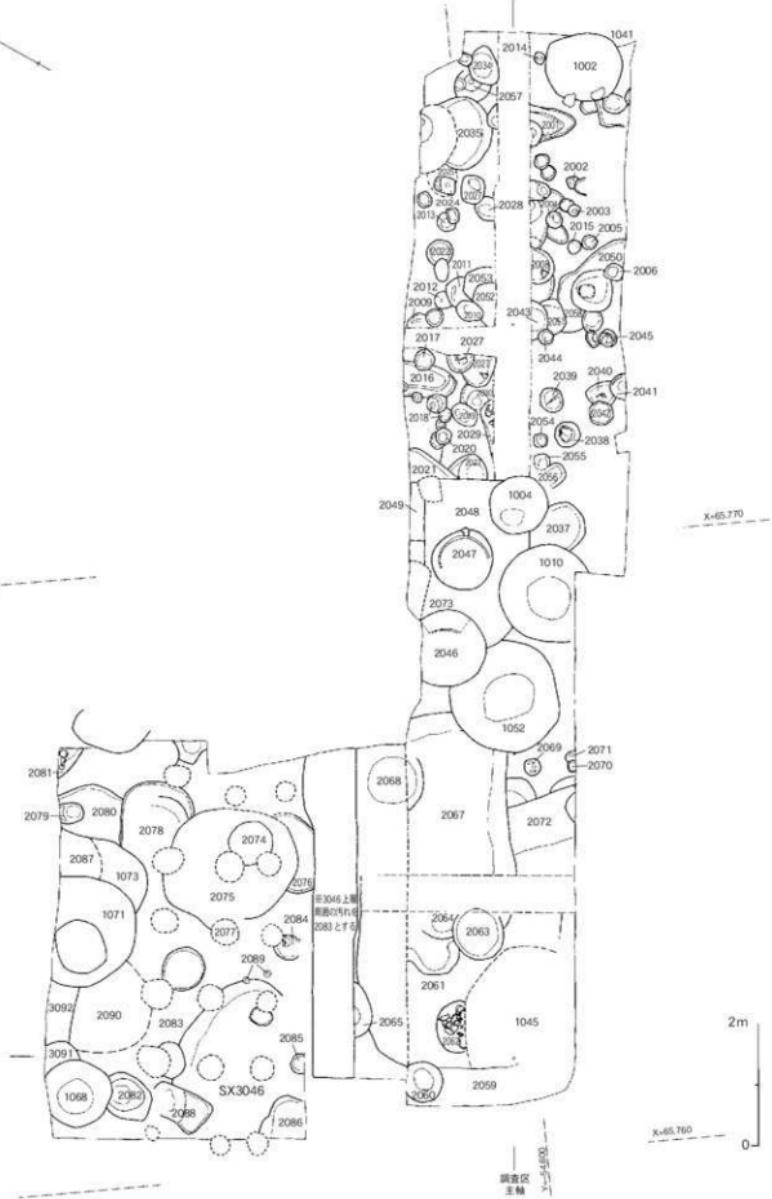


第4図 調査範囲図 (1/200)

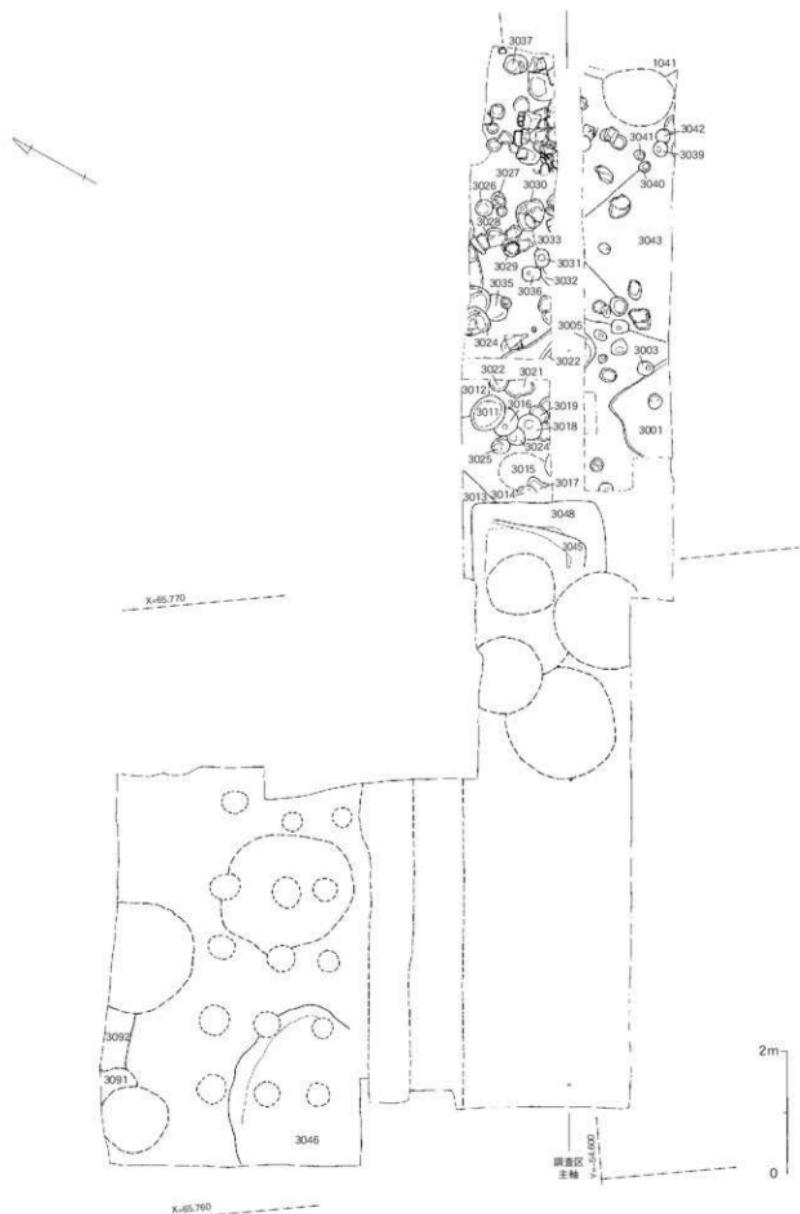
構の掘り込みがみられ、一回の埋立てはその程度の厚さであった可能性もあるが、埋立て前のSX3046と第2面検出の土坑SK 2035や2084で同じ白磁碗IV類が多く出土しており、埋立てから第2面検出面までは大きな時期差は無いものと考えている。ただ1～2面間で検出した焼土ブロック整地層の焼土ブロックには木舞孔がある土壁が出土しており、火事の後に周囲に立ち並んでいた土倉等を壊して整地



第5図 第1面全体図 (1/80)

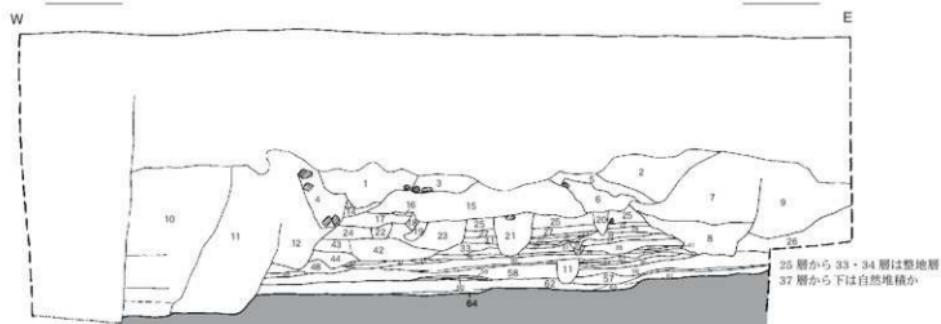


第6図 第2面全体図 (1/80)

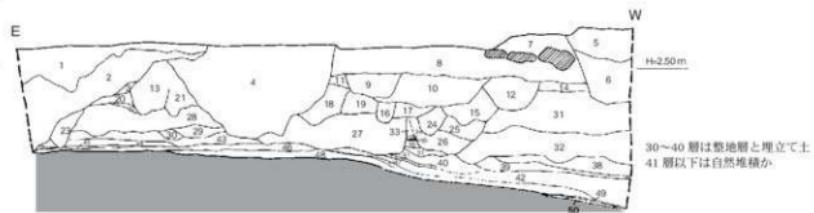


第7図 第3面全体図 (1/80)

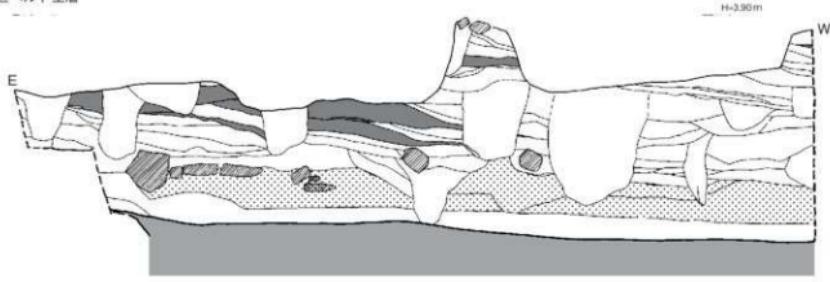
I区北壁土層



II区ベルト土層



I区ベルト土層



第8図 調査区土層図 (1/60・I区ベルト土層は1/30)

した可能性が高く、下から上までが1回の整地ではないと考えられる。

出土遺物は埋立て層下の暗茶褐色土から馬、牛、鹿、猪、犬などの動物遺存体が散乱した状態で出土すると共に、多量の箸や折り敷き、下駄、鼻縁、荷札片などの木製品、桃か梅の種などが出土しており、波打ち際に塵を廃棄した状況を示すが、これは隣接する第14次調査で出土した白磁の一括廃棄が荷揚げ時に割れた陶磁器を海中に投げ捨てた状況と重なるものがあり、11世紀後半では本調査地点が荷揚げ場に近い波打ち際だったことを示すものである。また、整地層中から多くの動物遺存体や土師皿が出土しており、整地工事に伴って祭祀なども行われたものと思われる。

2. 各調査面と土層の概要

1) 第1面 現地表から約1.8m下の標高2.7m前後に設定した。直上までRC建物の基礎が入っているため第1面はRC建物に伴う搅乱が多い。またI・IIの境界とIII区北西側には中世から近世の井戸が

11基掘られており、井戸が集中する。またI区の北・東壁土層では近世の掘込みが多数確認できるのに対し、I区内では近世の掘込みはほとんど見られないなど、近世を通じて土地利用における何らかの規制が働いているものと思われる。検出した遺構は12世紀中頃から近世までである。遺構を掘下げた時に厚さ10cmほどの焼土ブロック整地層を広い範囲で確認したことから第2面まで掘り下げる前に一度焼土ブロック整地層の上面で止めてから、焼土ブロック整地層を丁寧に掘り下げて遺物を取り上げた。焼土ブロック整地層の下面で遺構検出を行ったが、柱穴を数基確認したのみで、埋立て直後の12世紀頃と考えられる遺構は少なかった。

2) 第2面 第1面から50cm下げる標高2.2m前後に設定した。I区南端からII・III区はSK2048やSK2067など大きな掘込みが見られるがI区ではSE3043以外は大きな遺構は少なく柱穴状遺構が多い。焼土ブロック整地層の下層に位置しており、遺構の時期としては12世紀中頃以前である。ただ、1面目で見逃した遺構も多いと思われ、特にII区では焼土ブロック整地層もなく遺構の切りあいが不明瞭だったため、下層から新しい遺物が出土している。

3) 第3面 第2面から30cm程下げる標高1.9m前後に設定した。I区では整地層がまだ残っているがII・III区では細かな水平方向の整地層が見られなくなり、遺構もほとんどなくなる。整地層の下層は褐色土で礫を多く含み、埋立て土と考えられる。褐色土の下は白色細砂と有機物を多く含む暗茶褐色土の互層で、海成堆積と考えられる。III区のSX3046は海成砂層と思われる白色砂層のしたにある産みで覆土は白色砂と暗茶褐色土の互層で、暗茶褐色土が木製品や動物遺存体など有機物を多く含んでいた。埋立てを行う前の廃棄坑と考えられる。

4) 整地層について I区とII区の土層ベルトで検出した。II区西側では後世の切りあいが激しく、どこまで整地層が伸びていたのかは不明である。地盤となる海成堆積の白色粗砂層はI区からII区の中央部まではほぼ平坦であるが、II区の西側では西側の冷泉公園に向かって緩やかに傾斜していく。調査区内ではその上に約70cm程の厚さで褐色土による埋立てと、その上層の薄い黄褐色砂質土と白色砂を交互に積み上げた整地を確認した。整地層の厚さは最大で70cm程遺存しており、だいたい厚さ20~30cm毎に柱穴状の掘り込みがみられるが、これが一回の整地の単位なのか整地時の土木工事に伴う柱穴なのかは現在不明である。第8図の整地層には焼土ブロックを多く含む整地層が3面確認されている。これは火災後に焼けた土壁を壊して整地した可能性があるが、SE3043の井筒から多量の焼土ブロックが出土していることから、12~13世紀の層であると考えられる。I区では焼土層は1面目と2面目の間に位置するが、焼土層からは白磁碗VII類が多く出土した。また口縁端がやや外湾し、内底部を環状に掻き取る白磁III類も出土しており、焼土層の時期は白磁碗からも12世紀と考えられる。焼土層下の

整地層中からは白磁碗IV類の破片が多く出土した。焼土層は西側に緩やかに傾斜しており、またその上層の整地も全体的に西側に傾斜しているため、埋立てで出来た造成地は平坦でなく、海に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。

3. 遺構と遺物

1) 溝 6条出土した。

SD1044(第9図) I区東端に位置する。北と東側が調査区外に伸び、西側も土坑に切られるため長さや幅も不明であるが、現状で幅20~35cm、長さ1.4m、深さ20cm前後を測る。12~14世紀の土器が多く出土しており、また14世紀頃のSK1027に切られるため中世前半と考えられる。

SD1054(第9図) II区西端で検出した。溝もしくは竪穴状の掘込みである。現状で幅1.2m、長さ3.5m、深さ40cmを測る。15世紀頃の瓦質火鉢や瓦が出土した。15~16世紀か。出土遺物(第10図001~003)。001は巴文の瓦当である。002は瓦質火鉢である。003は瓦質捕鉢で調整は横ナデを施す。

SD1063(第9図) III区西端に位置する。両端を切られるが現状で長さ1.6m、幅58cm、深さ23cmを測る。13~14世紀か。出土遺物(第10図004~008)。004は龍泉窯系青磁鉢で005・006は青磁盤である。007・008は須恵質平瓦である。007は粗い斜格子で格子中に十字模様を施す。008は細かな斜格子タタキで凹面は布目压痕である。

SD1064(第9図) III区南辺に位置する。東側は自然に閉じ、西側はSK1074に切られる。現状で長さ1.5m、深さ10cmを測る。出土した瓦質火鉢等から14世紀前後と考えられる。

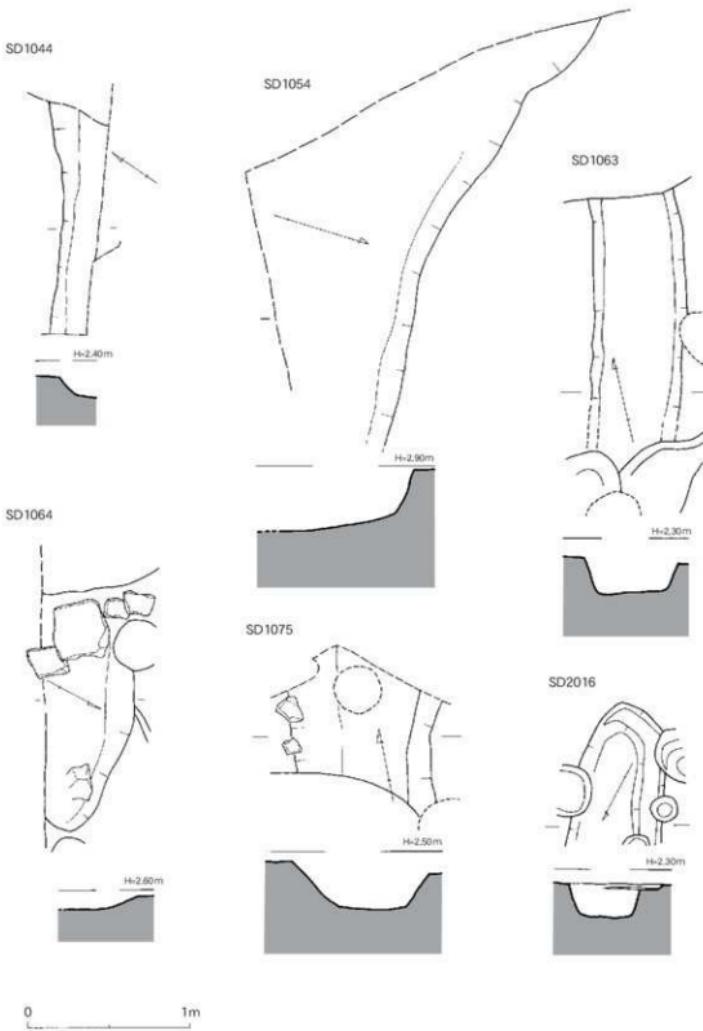
SD1075(第9図) III区中央部に位置し幅80cm、深さ60cmを測る。共に中世後半から近世と考えられるSX1062とSK1066に切られており、14~15世紀である。

SD2016(第9図) III区北辺中央に位置する溝もしくは土坑で、現状で長さ90cm、幅56cm、深さ20cmを測る。11~13世紀の白磁片、褐釉陶器、瓦器椀、土師椀等の出土遺物から中世前半と考えられる。

2) 井戸

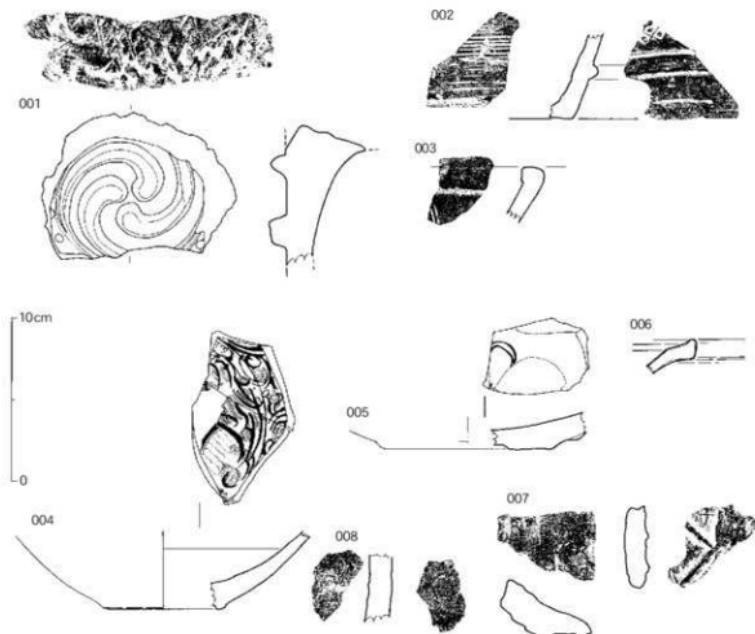
SE1045(第11図) II区西端に位置する。掘方は円形で上面径2.5m、深さ2.3mを測る。断面は逆台形で、最下段の井筒掘方は径98cmを測る。覆土は暗灰褐色土で上層では薄い白色シルトと炭化物を層理状に含む。土色は中央部がやや暗色で井筒埋土と思われるが土色の変化は漸移的である。井筒は底面に瓦片を敷いた上に据えられていた。井筒桶は最下層の1段しか遺存していない。桶の板材は幅が4.5~6cmが多いが、最も広いものは12cmとまとまりがない。板材の厚さは13mm前後である。出土遺物(第11図009~027)。009は龍泉窯系青磁碗、010は染付碗底部である。012・013は白磁合子、014・015は白磁壺頸部、016は白磁壺底部で内面と外底部は露胎である。017は褐釉陶器壺口縁で復元口径7cmを測る。018は灰綠釉小壺である。内面は露胎で赤茶褐色を呈す。口縁端上面に沈線を施す。019は陶器甕で口縁端と内面の一部に赤褐色釉を施す。露胎は褐灰色を呈す。020は綠釉陶器片で胎土は淡赤褐色で緻密である。021は陶器壺で緑黄褐色を呈す。022・023は瓦質の鉢である。022は外面はミガキ、内面はハケで023は全体を丁寧に磨く。024は土師質平瓦で両面ともハケである。胎土中に砂が多い。025は須恵質平瓦で凸面に複雑な斜格子タタキを施し西区元岡遺跡群第31次調査の瓦窯や西区斜ヶ浦瓦窯の出土瓦に似る。026・027は井筒外側で出土した。026は瓦質火鉢、027は滑石製小型容器で長さ31mm、幅18mm、高さ12mmを測る。15~16世紀か。

SE1052(第12図) II区東側に位置し東側をSE1051とSE2046に切られる。掘方平面は楕円形で径2.5mを測る。深さ1.1mまでは逆台形に掘下げ、中央部を径80cm、深さ1m掘下げる。井筒は遺存しない。井戸中央部に竹を垂直に埋めて祭祀を行っている。竹は太さ6cm、節の間隔は24cmを測る。



第9図 溝実測図 (1/30)

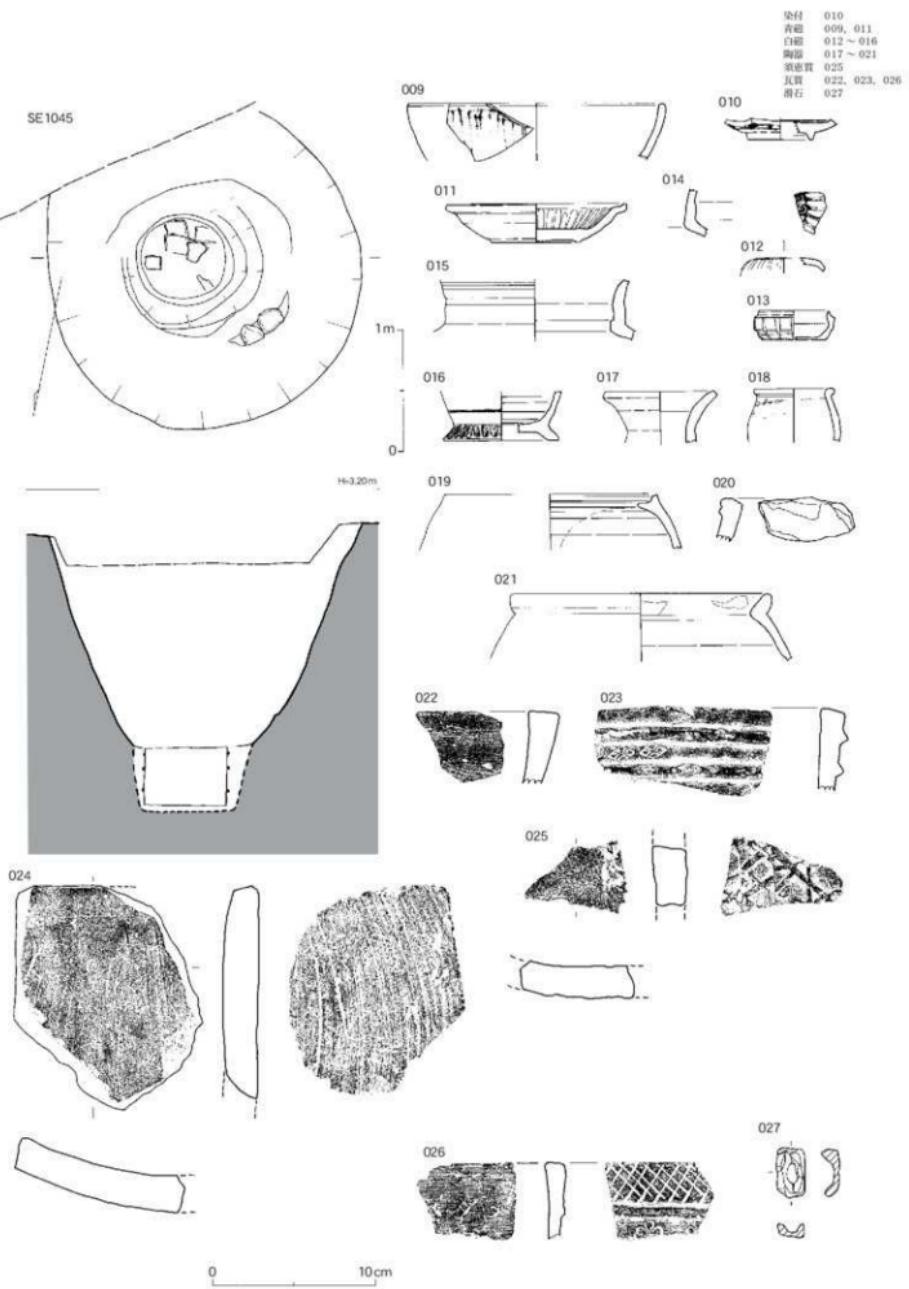
青磁 004～006
須恵器 007, 008
瓦質 001～003



第10図 溝出土遺物実測図 (1/3)

井戸の祭祀にはこの他SE2063の和鏡の投げ込みやSE2068の井筒に銅錢を挟むタイプがみられる。出土遺物(第12図028～046)。028～031は国産陶器碗。032は灰黄色釉の陶器皿で露胎部分は赤褐色を呈す。034は陶器鉢で口縁は暗赤褐色、その他は暗黄褐色の釉である。042は瓦質土器で内面に煤が付着しており、火鉢として使用か。043は瓦器楕高台部、044は土師皿で口径6.4cm、器高1.3cmで底部は糸切りである。045は軒平瓦である。046は羽口先端で先端径6.7cm、孔径2.3cmを測る。近世。SE1071(第13図)Ⅲ区北側に位置する。掘方平面は梢円形で径1.8mを測る。断面は深さ1mまでは逆台形で、それから下は垂直に1.2m下がる。井筒木材は遺存せず、検出時に径90cmの井筒底と底面から70cm上で竹製擁の痕跡を確認した。また底面から30cm上で土師皿と曲物の底板が出土した他、井筒内からは炉壁と瓦片が多量に出土した。近世と考えられる。出土遺物(第13図047～059)。047は陶器皿で釉は灰色。外面は口縁以外は露胎で見込みに目痕が4個みられる。048は五彩の碗で内面は赤と青、外面は赤、青、黒、黄で染付状の模様を描く。049は白磁皿。050は赤褐色陶器鉢口縁である。調整は横ナデでタタキ痕を消す。051は瓦質鉢、052・053は瓦質火鉢。054は須恵器平瓦。056は輪の羽口、057・058は炉壁で片面が被熱している。057は高さ3.8cm、奥行き4cmで破損面がない。棒状の粘土を積んで炉を築いている。059は土製鋳型である。製品は直径12cm程でややつぶれた半球状を呈す。鋳型、炉壁、羽口、鉄滓が出土し近くに鋳物工房があったと考えられる。

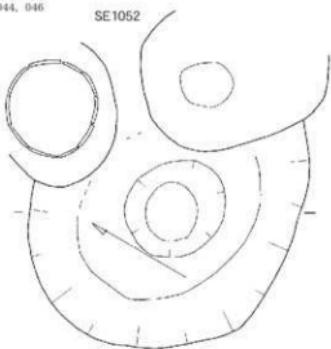
SE1073(第14図)Ⅲ区北側に位置する。深さ1mまでは緩やかに、それからは径70cm、深さ90cm



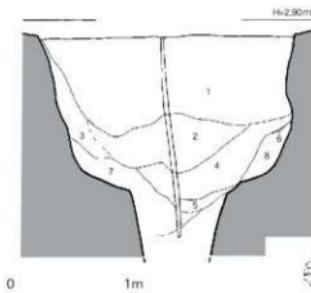
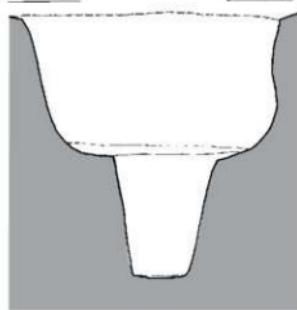
第11図 SE 1045 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

細部 029, 030
 白細 033, 035, 036
 陶部 028, 031, 032, 034, 037 ~ 041
 瓦質 043, 045
 上部 044, 046

SE1052

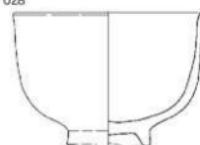


H=2.90m

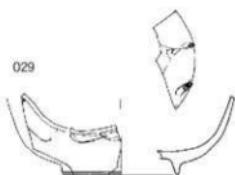


0 1m

028



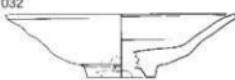
029



030



032



031



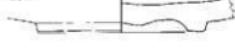
033



034



037



038



036



039



044

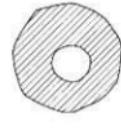
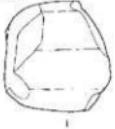


041

040



046



SE1052

1. 黒褐色土 土器、甕、瓦片、炭化物小片を多量に含む
2. 暗褐色土 瓦片を多く含む 炭化物多く含む
3. 黑色土
4. 黄茶褐色土 瓦片含む 炭化物は少ない
5. 暗褐色土 ドバ 瓦片多く含む 結まり弱
6. 白色砂
7. 暗褐色土 炭化物多く含む
8. 暗黄褐色土 積層解?

0 10cm

第12図 SE1052遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

ではほぼ垂直に掘込む。井筒は確認できなかったが、板材が底面から50cm上で出土した。板材の遺存状態は良好で井筒の腐敗は考えられない。井戸廃棄時に井戸枠を抜いている。時期は近世。出土遺物（第14図060～068）。060～064は近世国産陶器。065は陶器鉢で釉は暗褐色、露胎は赤褐色を呈す。釉は外面のみで釉掛け後回転させ釉を搔き取る。068は石臼片である。復元径13.6cmを測る。

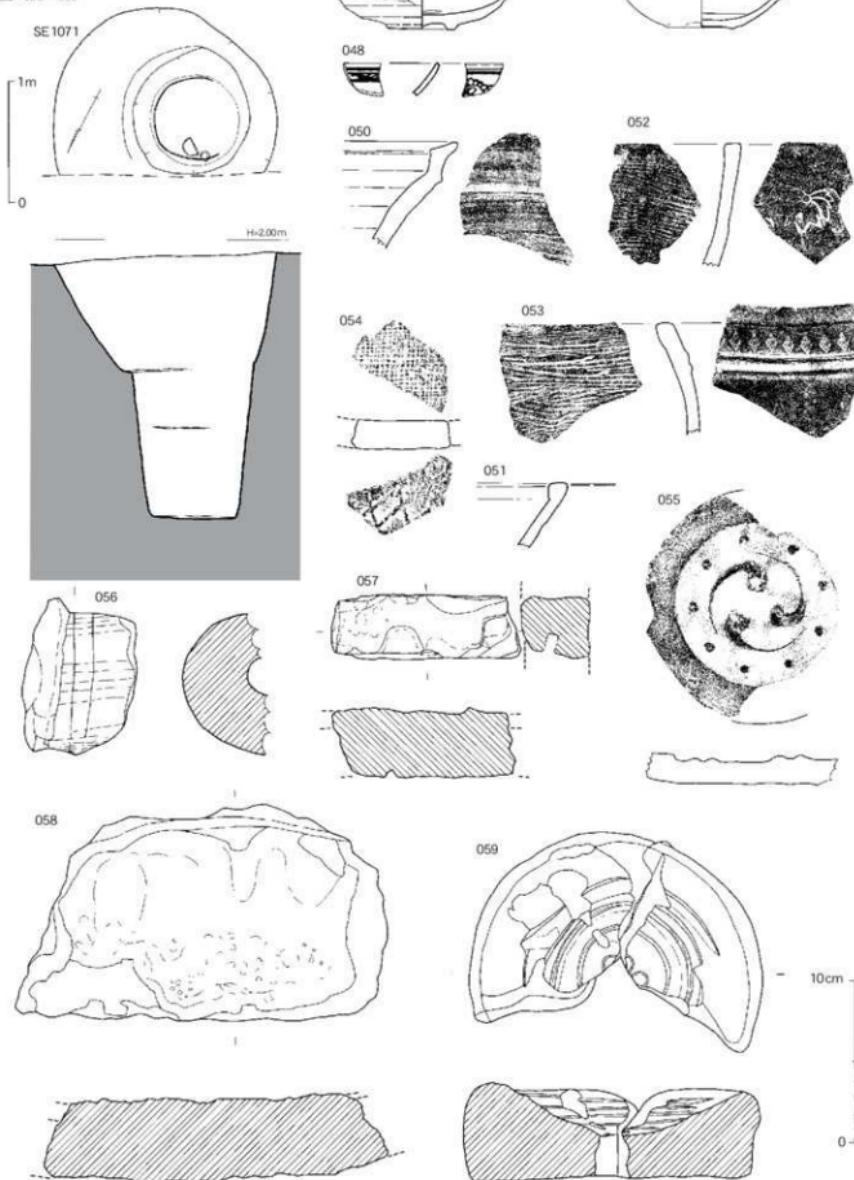
SE2047（第15図） I区とII区の境界で検出した一部瓦組みの井戸である。掘方径1m、井筒径75cmを測る。瓦は検出面から確認した3段のみで、その下ではほぼ同径の木痕を確認した。下部は木桶である。標高0.9mで湧水点に達したので掘下げを中止した。遺物は12～13世紀の貿易陶磁や国内陶器、土師器の他に鉄滓や羽口、古代瓦やイルカ椎骨などが出土した。時期は近世国産陶器や七輪片などから近世後半である。出土遺物（第15図069～075）。069・070は白磁碗、071は瓦質鉢である。073は須恵質瓦片で格子タタキ。074・075は瓦で074は井筒内から出土、凸面上側中央部に2つ並んだ点と左下の窪みは蟻の圧痕である。殻長は1.37cm。圧痕の意味は不明で他の瓦では確認できない。075は井筒瓦である。幅25cm、長さ31cm、厚さ3cmを測る。凹面は丁寧なナデ、凸面のナデは粗い。

SE2063（第15図） II区中央部に位置する。上半部は削平され下半部のみの遺存である。現状で径75cm、深さ120cmを測る。井筒は桶で木質の遺存状態は悪い。板材の幅は10～13cm程度で厚さは不明。桶を締める縦が一部遺存していたが、他の井戸が竹紐を編んだ縦に対し木皮状の纖維を幅1.2cmの紐にして使用している。出土遺物は径9.7cmの銅鏡が1枚出土した他は12～14世紀の陶磁器を中心とし、古墳時代から古代の土器や獸骨も出土した。出土遺物（第15図076～082）。076は常滑産陶器甕か。外面黒褐色、内面暗灰色を呈す。077は陶器甕で全面施釉で暗褐色を呈す。078は口径9.6cm、器高1.3cm、079は口径15.7cm、器高3.5cmを測る。いずれも糸切りで078は板状圧痕あり。080は土師器甕である。081は土玉で径2.8cm、082は石玉で径4.5cmを測る。

SE2068（第16図） II区中央に位置する。上半部をSK1053に切られる。現状で井筒桶が4段分遺存していた。桶高は下から1段目が75cm、2段目が48cm、3段目が34cmを測る。桶の上端から3～6cmの所を竹製の縦で締め、その出張りに上の桶を乗せる。縦は竹を幅2.5cmに切り、それを2重もしくは3重に捩って上下端からやや離して締める。1段目と2段目は桶が高いためか、中央からやや下側を3本目の縦で締めている。井筒内から出土した龍泉窯系青磁小碗や陶器片から13～14世紀である。井筒下段から1段目と2段目の桶の間から銅鏡が1枚出土した。祭祀と思われる。木桶に銅鏡の痕跡が残る（図版5～6）。出土遺物（第16図083）は瓦片である。ほぼ平らで厚さも1cm以下と薄い。「T」字型の線刻がある。

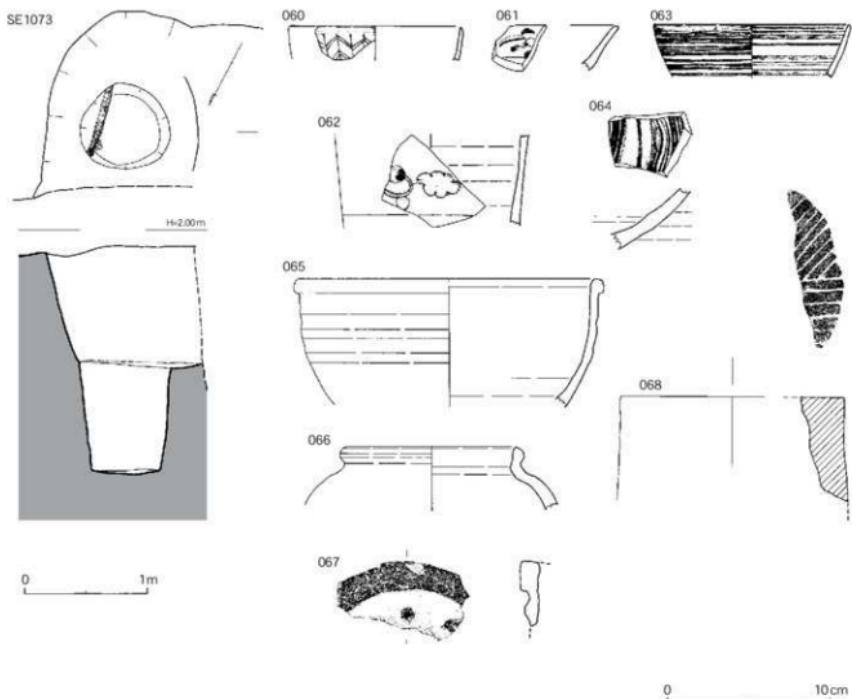
SE2075（第16図） III区東側に位置する。掘下げ時には井筒を2074、掘方を2075として遺物を取り上げた。掘方平面は梢円形を呈し、径2.3mを測る。検出面からの深さ2.1mまでは緩やかな逆台形で掘込み、その後底面東端を径70cm、深さ75cmに掘下げ、井筒を据えている。井筒は5段分が遺存しており、下から1段目が高さ78cm、2段目が41cm、3段目が40cm、4段目が36cmで、5段目は上端を削平されており現状で27cmを測る。桶上端から7～10cmと下端から10cm（下から2段目は16cm）の2ヶ所を竹製の縦で締めているが、1段目の桶の下端の縦は3重に継ったものではなく、幅17cm程の範囲を一重に巻いたもので、その他に上端から31cmの所も竹の縦で締めている。それぞれ桶上端の縦に上の桶の下端を乗せて、桶がずれ落ちるのを防ぐ。桶材は幅5～6cm、厚さ1.5cmの板を使用。出土遺物は12世紀前後の貿易陶磁の他にも多くの遺物が出土したが、最も新しい遺物は15～16世紀頃のものである。出土遺物（第16・17図084～108）。084～088は青磁碗で086は見込みにスタンプ有り。089は高麗陶磁碗で淡灰色を呈す。090は陶器甕片。091は瓦器椀で外面にヘラ記号有り。092は土鍋で外面に煤が付着する。093は土師質瓦で両面にナデを施す。096は陶器蓋で外面はやや赤身を帯びた

染付 048
陶器 047, 050
白磁 049
須磨 054
瓦質 051 ~ 053, 055
土器 056 ~ 059



第13図 SE 1071 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

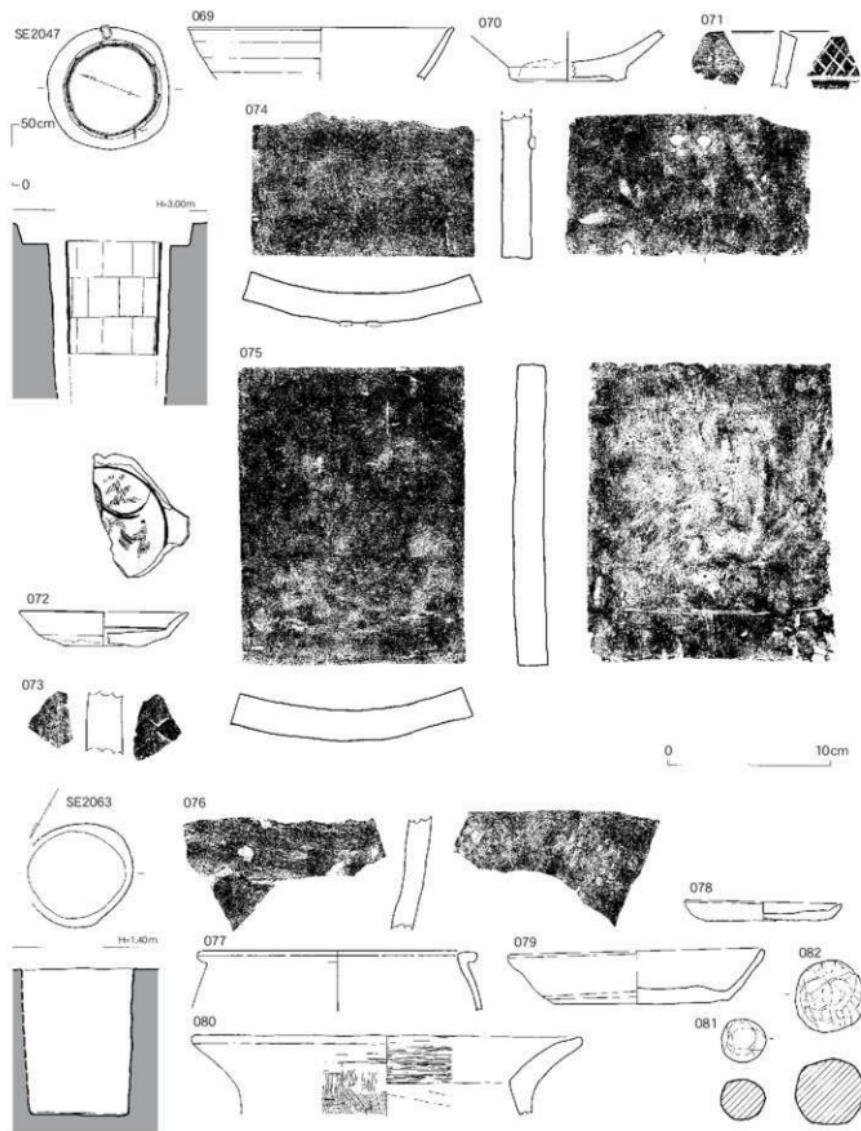
染付 060～062
 脱器 063～066
 瓦質 067
 石臼 068



第14図 SE1073遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

暗灰色を呈す。097は陶器壺で釉は褐色を呈す。098は陶器鉢I-1類、099は褐釉陶器甕底部で内外面に粗いタタキ痕が残る。100は瓦質鉢口縁、101・102は瓦質火鉢、103は須恵器底部で内面は同心円、外表面は平行タタキの後にナデを施す。104は糸切りで淡黄褐色を呈す。105～108は土錘である。SE3043(第17図) I区で検出した。平面は隅丸方形で主軸をN-22°-Eにとる。径は1.5m前後で検出面からの深さ70cmまでは緩やかな逆台形で、底面中央を径60cm、深さ45cmで掘下げている。井筒の木質は遺存していない。井筒内の埋土は多量の焼土ブロックと炭化物で、褐色砂質土を薄いレンズ状に含む。焼土ブロック中に木舞孔がある土壁状焼土があり、倉庫土壁や製鉄用炉壁と考えられるが、多量の焼土がでているにもかかわらず鉄滓が出土しておらず、火災等で焼失した建物土壁を壊して整地したと考えられる。出土遺物は11世紀後半から12世紀前半の貿易陶磁で、土師壺と皿も全て底部切り離しはヘラ切りであるため井戸の廃棄時期は11世紀末～12世紀前半である。またこの焼土ブロックはI区の1面下で検出した焼土ブロック整地層と対応すると考えられ、12世紀初頭の店屋町で火災が発生したことが判る。以前の調査でも12世紀後半の火災にあった青磁が一括廃棄(地下鉄祇園町入口2・3区調査)され、火災は複数回起きた模様である。出土遺物(第17図109～116)。109～111は白

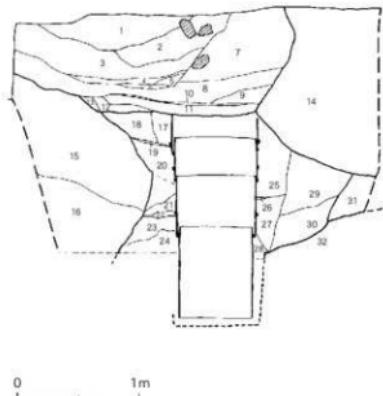
青磁 072
 白磁 069, 070
 陶器 076, 077
 瓦片 073
 瓦質 071, 074, 075
 土器 078~080
 石製品 082
 金製品 081



第15図 SE 2047、SE 2064遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

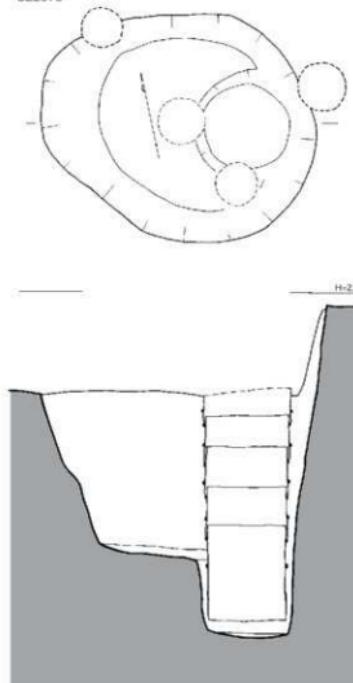
SE2068

H=32m



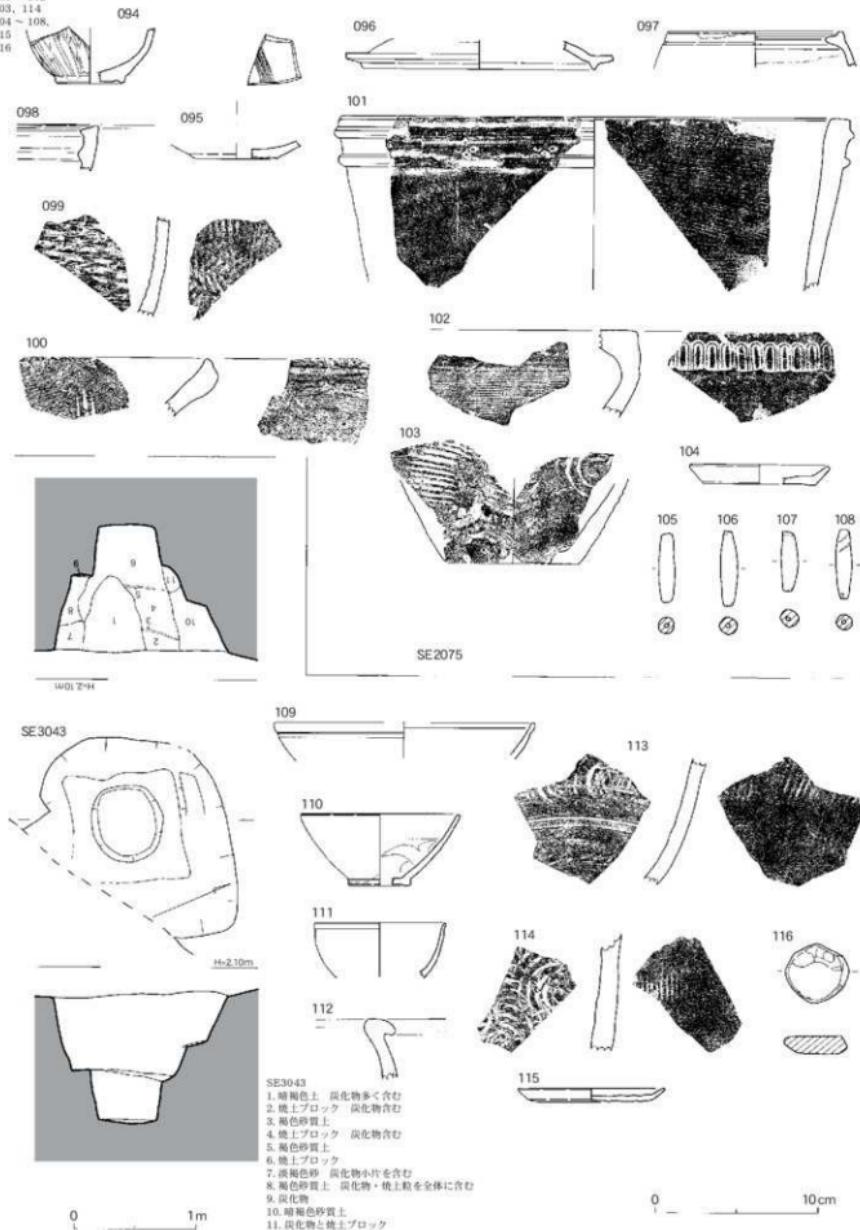
SE2075

H=270m

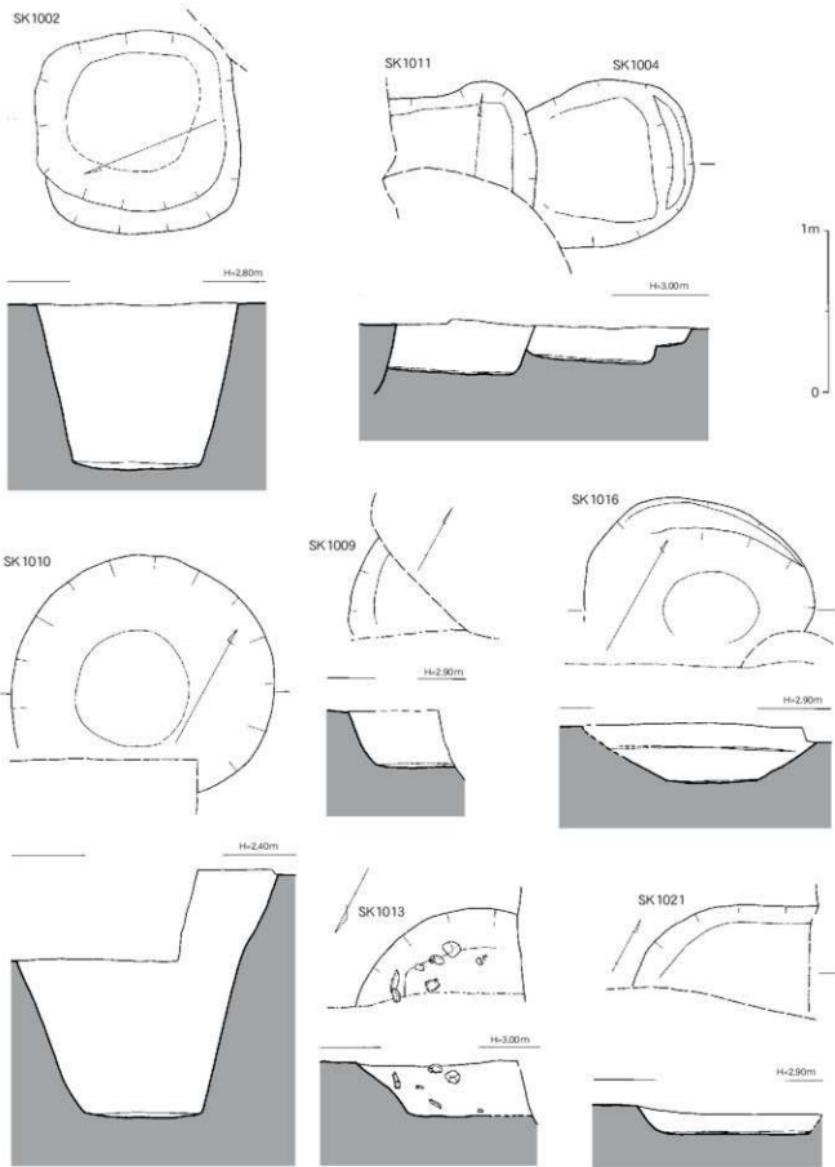


第16図 SE2068、SE2075遺構・遺物実測図（1/40・1/3）

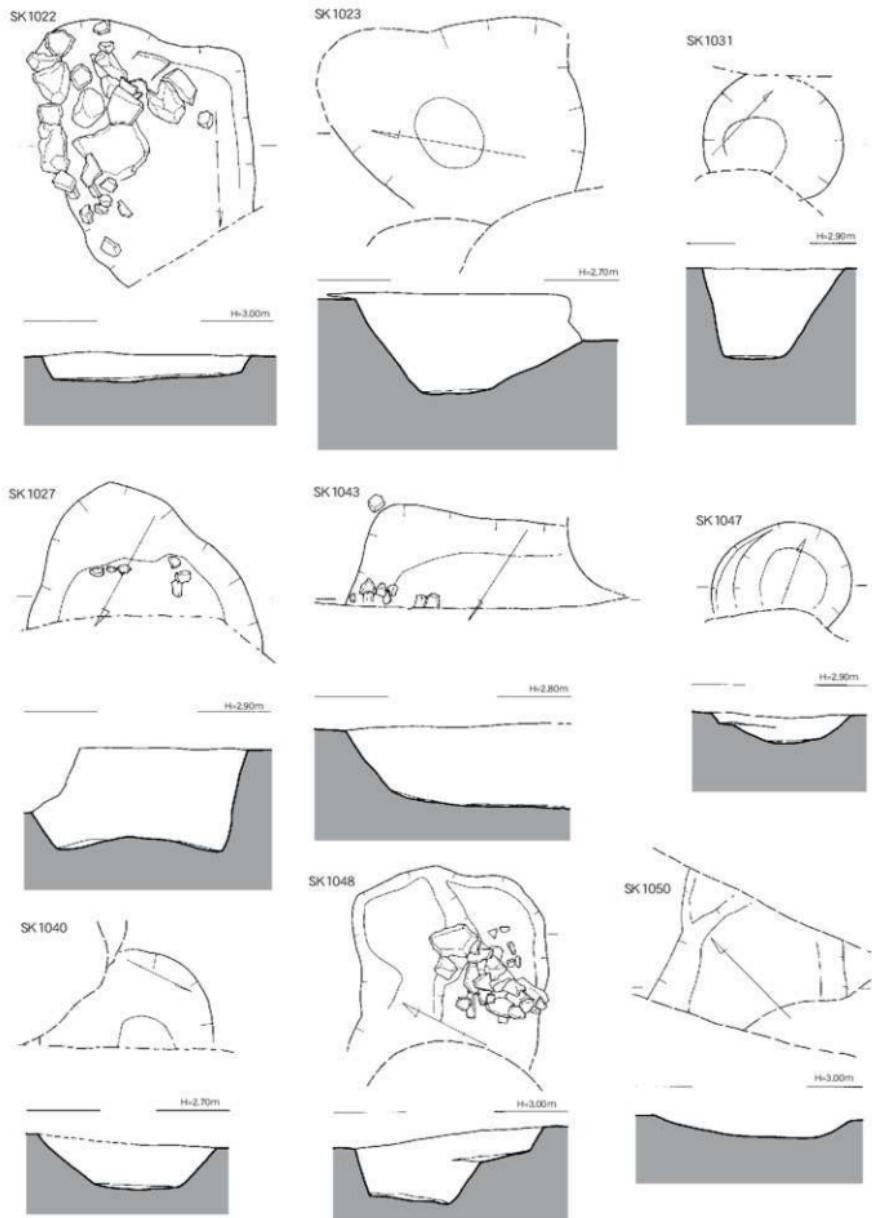
青鉢 094, 095
 白鉢 109 ~ 111
 陶器 096 ~ 099,
 112, 113
 瓦質 100 ~ 102
 瓦 103, 114
 土器 104 ~ 108,
 115
 磐石 116



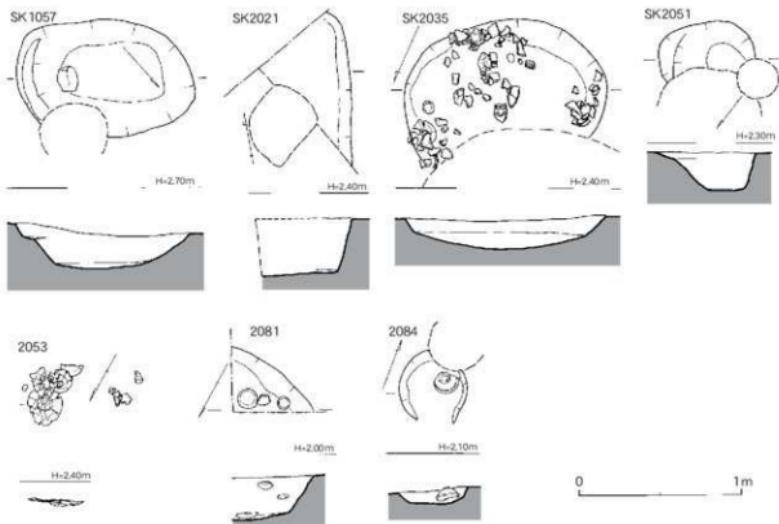
第17図 SE 3043遺構・遺物実測図、SE 2075遺物実測図 (1/40・1/3)



第18図 土坑実測図1 (1/30)



第19図 土坑実測図2 (1/30)



第20図 土坑実測図3 (1/30)

磁碗である。112は陶器鉢口縁で灰緑褐色の釉を全体に施す。113・114は須恵器甕で113はタタキ後丁寧な横ナデを施す。内面は同心円状圧痕で一部ナデ消す。外面に薄くオリーブ色の自然釉がかかる。胎土は精良で白色砂を少量と黒色粒を多量に含む。黒色粒は外表面に集中し胎土中にはほとんどみられない。113は調整は似るが、釉がかからず、胎土は白色砂を含まず、黒色粒のみを含む。115はヘラ切りの土師皿で板状圧痕あり。淡黄褐色で細砂を少量含む。116は滑石製円盤である。石鍋を再利用しており煤が付着する。

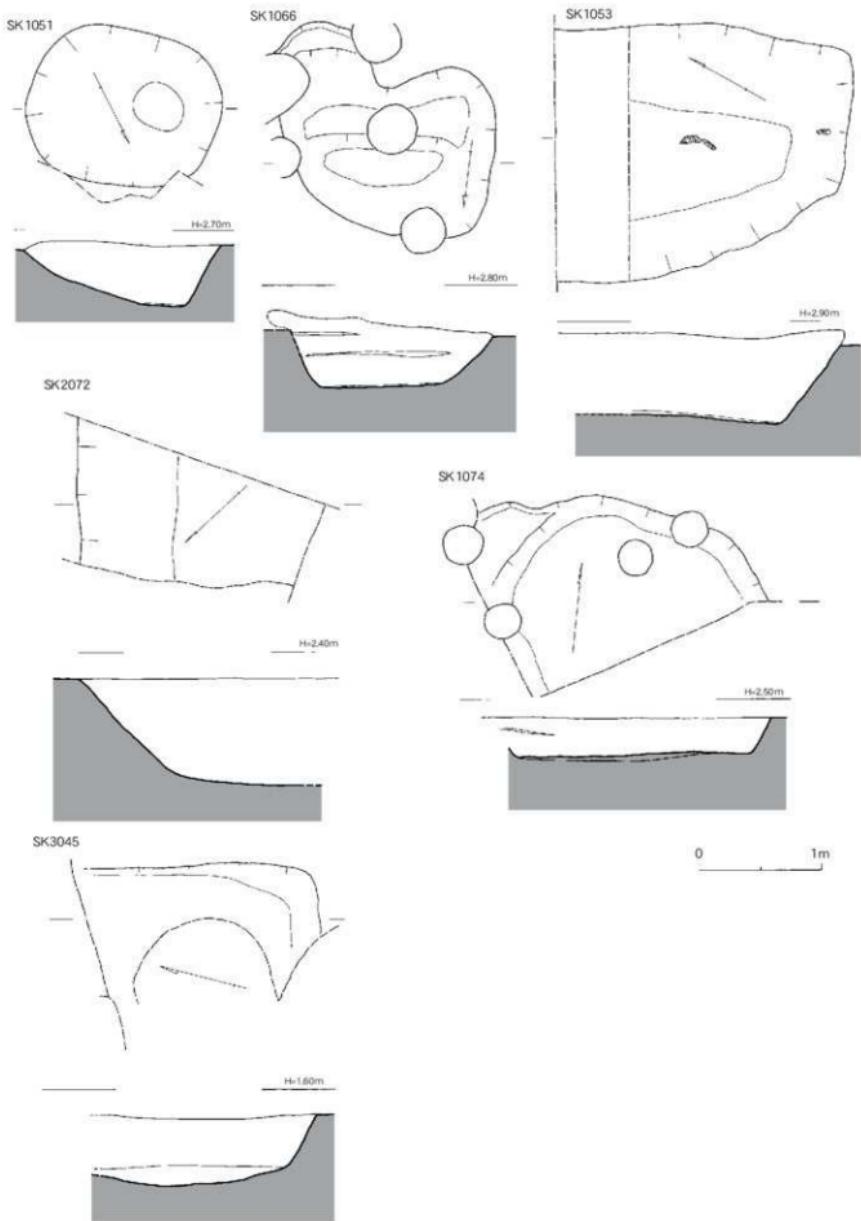
3) 土坑

SK1002 (第18図) I区の東南端に位置し、平面は隅丸方形で径123cm、深さ101cmを測る。断面は逆台形である。埋土に炭化物と白色粘土層をレンズ状に含む。白磁碗IV類、束播系須恵器甕、土師皿（ヘラ切り）、土師杯（糸切り）などが出土した。中世前半か。

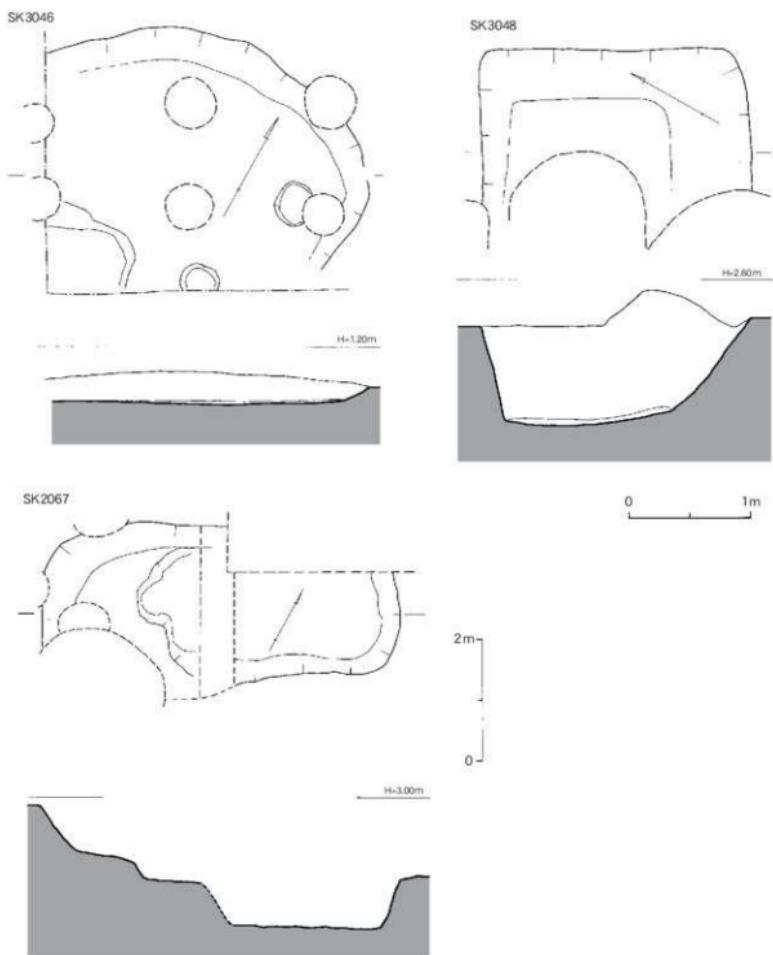
SK1004 (第18図) I区西側に位置する。平面は円形で径1m、深さ21cmを測る。断面は浅皿状で東側にテラスをもつ。埋土は暗灰褐色砂質土で多量の暗黄褐色土の小ブロックと少量の炭化物片を全般的に含む。多くの遺物が出土したが、新しい遺物は近世の可能性がある染付小片が出土した。

SK1009 (第18図) I区東南端に位置する。北側をSK1002に切られ、南側は調査区外に伸びる。深さは現状で34cmを測る。近世から近代の褐釉甕や瓦片が出土した。

SK1010 (第18図) I区とII区の境に位置する。平面は楕円形で長径1.6m、深さ164cm、底面径67cmを測る。遺物は中世前半の貿易陶磁を主とするが、いずれも細片で構成に伴う遺物は2点程出土した近世染付片と思われる。出土遺物（第23図117～119）。117は陶器擂鉢である。赤茶褐色を呈



第21図 土坑実測図4 (1/40)



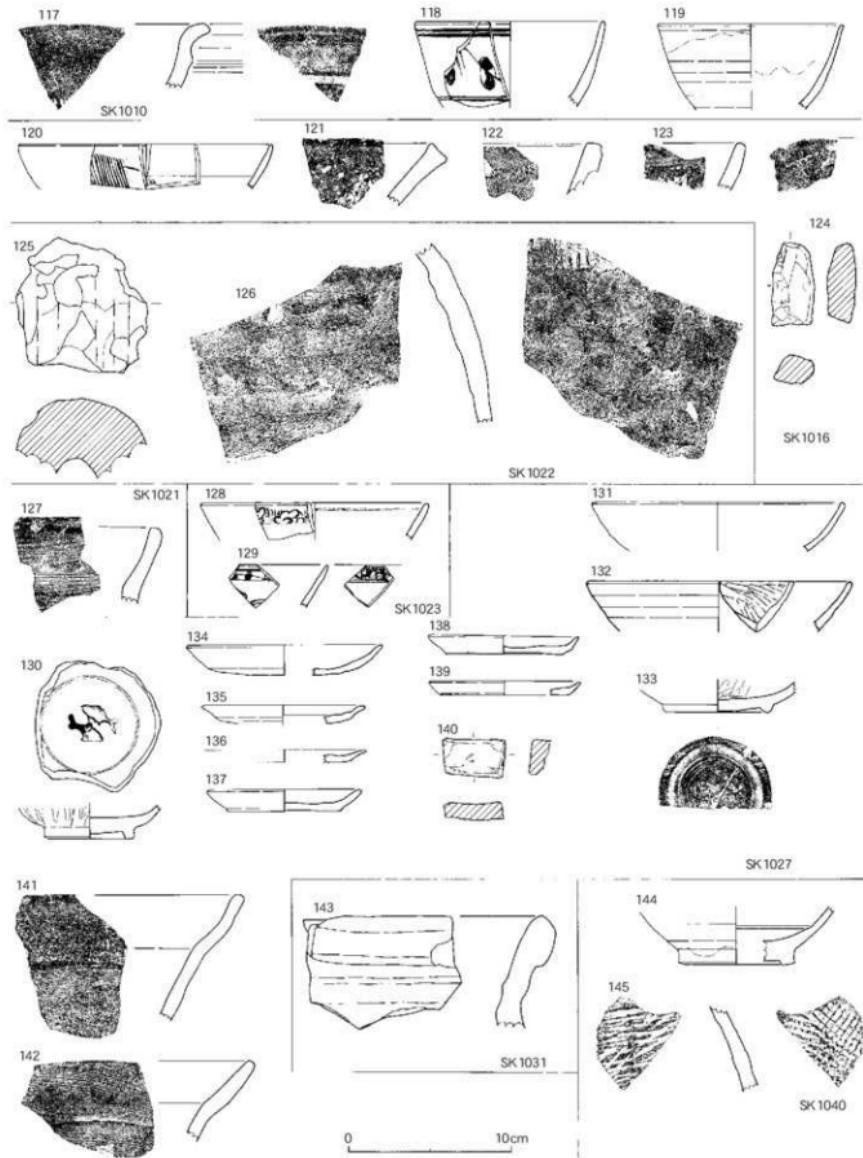
第22図 土坑実測図5 (1/40・SK2067は1/80)

し胎土は薄い淡赤褐色で黄色の縞がみられる。118は近世陶器碗である。119は陶器碗で釉は少しピンクがかる。

SK1011(第18図) I区西側に位置し、西と南を切られ形状は不明。断面は浅皿状で深さ31cmを測る。遺物は16世紀頃の龍泉窯系青磁碗や近世と思われる染付片で、時期は16世紀～近世と考えられる。

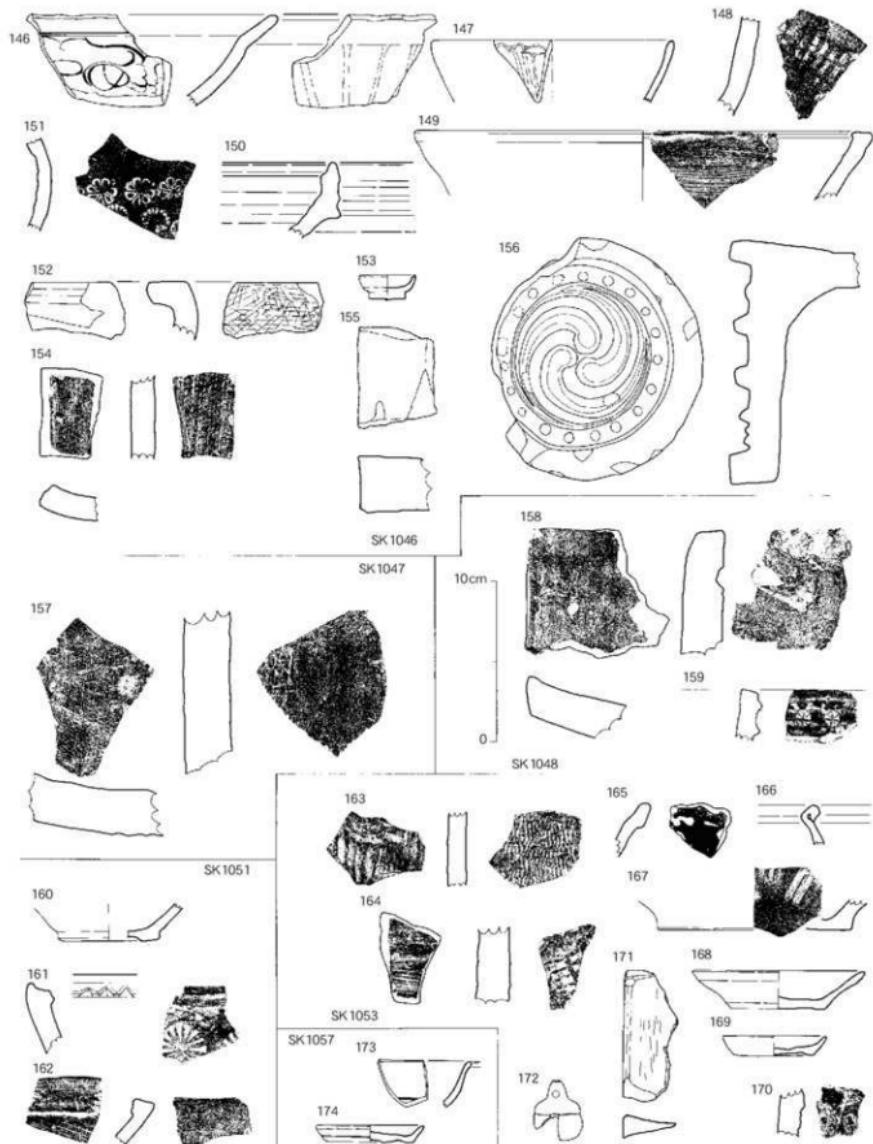
SK1013(第18図) I区東側に位置し、西側をSD1001に切られる。深さ68cmを測る。遺物は白磁

- 染付 118, 128, 129
 青磁 120, 130
 白磁 144
 陶器 117, 119, 126, 143, 145
 瓦質 132, 133
 上飾 121～125, 127, 131, 134～139, 141, 142
 塗石 124, 140



第23図 土坑出土遺物実測図1 (1/3)

- 柒村 173
 青磁 146, 147, 160
 白磁 148
 陶器 149, 150, 153, 163, 165, 166
 磁窯 154, 155, 157
 瓦葺 151, 152, 156, 159, 161, 162, 167
 土師 168 ~ 170, 174
 滑石 171
 土製品 172



第24図 土坑出土遺物実測図2 (1/3)

碗IV類や土師壺（ヘラ切り）など12世紀前後の遺物が多いが、14世紀頃の瓦質鉢片が出土している。SK1016（第18図） I区南辺に位置し南側が調査区外に伸びる。平面楕円形で長径1.4m、深さ38cmを測る。断面逆台形で底面径は58cmを測る。同安窯系青磁や国産陶器、土師質擂鉢が出土した。13世紀。出土遺物（第23図120～124）。120は同安窯系青磁碗、121～123は土師質鉢、124は滑石片である。

SK1021（第18図） I区東端に位置しSX1007に切られ、東側は調査区外に伸びる。断面は浅皿状で深さ18cmを測る。同安窯系青磁片や土鍋片（第23図127）が出土し、13～14世紀と考えられる。

SK1022（第19図） I区北辺に位置する。現状で東西幅1.25m、深さ17cmを測り、断面は浅皿状を呈す。掘方南東部から径20～30cm前後の礫が集中して出土した。そのうちの1個は径が40cm前後で上面が平坦であり根石等として使用された可能性がある。遺構埋土は上下2層に分かれ、上層は炭化物を多く含む灰色土、下層は炭化物を多く含み黒褐色を呈す。出土遺物は混焼の甕や土鍋、土師椀、土師皿などが出土しており、時期は中世前半か。出土遺物（第23図125・126）。125は輪羽口、126は常滑焼の大腹肩部である。釉は赤味を帯びる黄褐色、胎土は暗灰色で白・黒色粒を多く含む。

SK1023（第19図） I区西端に位置しSK1004に切られる。平面は不整楕円形で長径165cmを測り底面は径47cmと狭い。断面は底面に向かって急にすぼまる。遺物のほとんどは11～12世紀の遺物であるが、近世と思われる染付片が数点出土した。出土遺物（第23図128・129）。染付碗である。

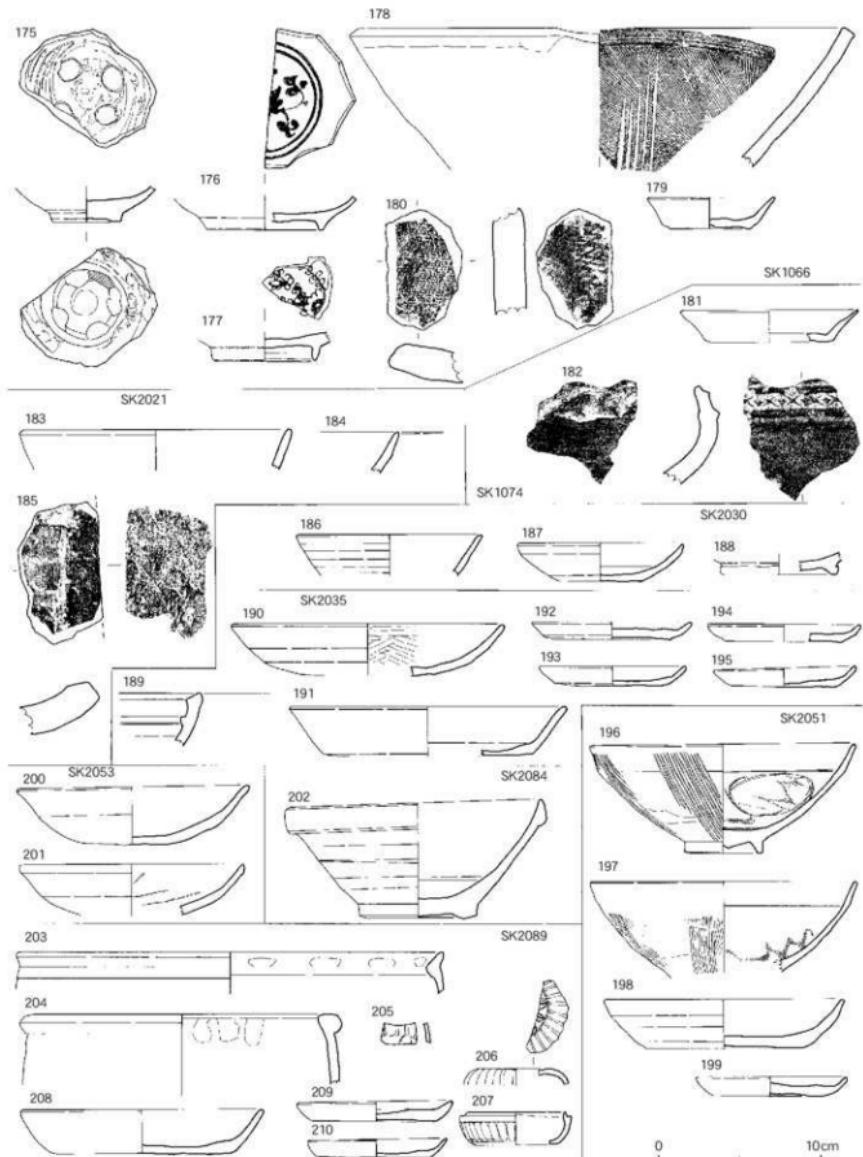
SK1027（第19図） I区南西側に位置する。平面形は不整形で現状で径1.4m、深さ60cmを測る。断面は逆台形で底面径は97cmを測る。覆土は暗黄褐色土で10～20cmの円礫を散漫に含む。底面付近で土師皿片が出土した。遺物は白磁碗IV・V類や白磁皿、龍泉窯系青磁碗IV類、陶器盤・鉢など11～12世紀の貿易陶器が主であるが青磁鉢や土鍋片など13～14世紀の遺物が若干出土した。出土遺物（第23図130～142）。130は龍泉窯系青磁壺で見込みに双魚文を配す。ただ134～139の土師皿が全てヘラ切りで古い様相を示すことから130や141・142の土鍋片は後世遺構からの紛れ込みである可能性がある。

SK1031（第19図） I区西北側に位置し南側を1024に切られる。平面は楕円形で径86cm、深さ56cmを測る。断面は逆台形で底面径は38cmを測る。褐色砂質土で黄白色粘土ブロックと炭化物小片少量を全体的に含む单層である。備前焼の甕口縁（第23図143）が出土しており、14世紀頃と考えられる。SK1040（第19図） I区に位置しSK1002に切られる。平面形は楕円形で推定径は1.3m、断面は逆台形を呈し深さ32cm、底面径52cmを測る。遺物は瓦質土器など13～15世紀の遺物が出土した。出土遺物（第23図144・145）。144は白磁碗底部。145は茶褐釉陶器甕で外面は光沢がある赤茶褐色を呈す。

SK1043（第19図） I区北辺に位置する。西端はSK1031に切られて平面形は不明。現状で東西1.4m、深さ52cmを測る。覆土は灰黄褐色を呈す。底部直上に10～25cm程の礫群を含む。炭化物小片を全体的に含む。出土遺物は白磁耳壺や白磁碗IV類、越洲窯系青磁碗、瓦器椀、土師壺（糸切り）などの他に大型魚類の尾鱗のものと思われる軟骨が出土している。遺構の時期は13～14世紀と考えられるが、この時期にはすでにマグロなどの大型魚類を捕獲する外洋漁業が行われていたことが判る。

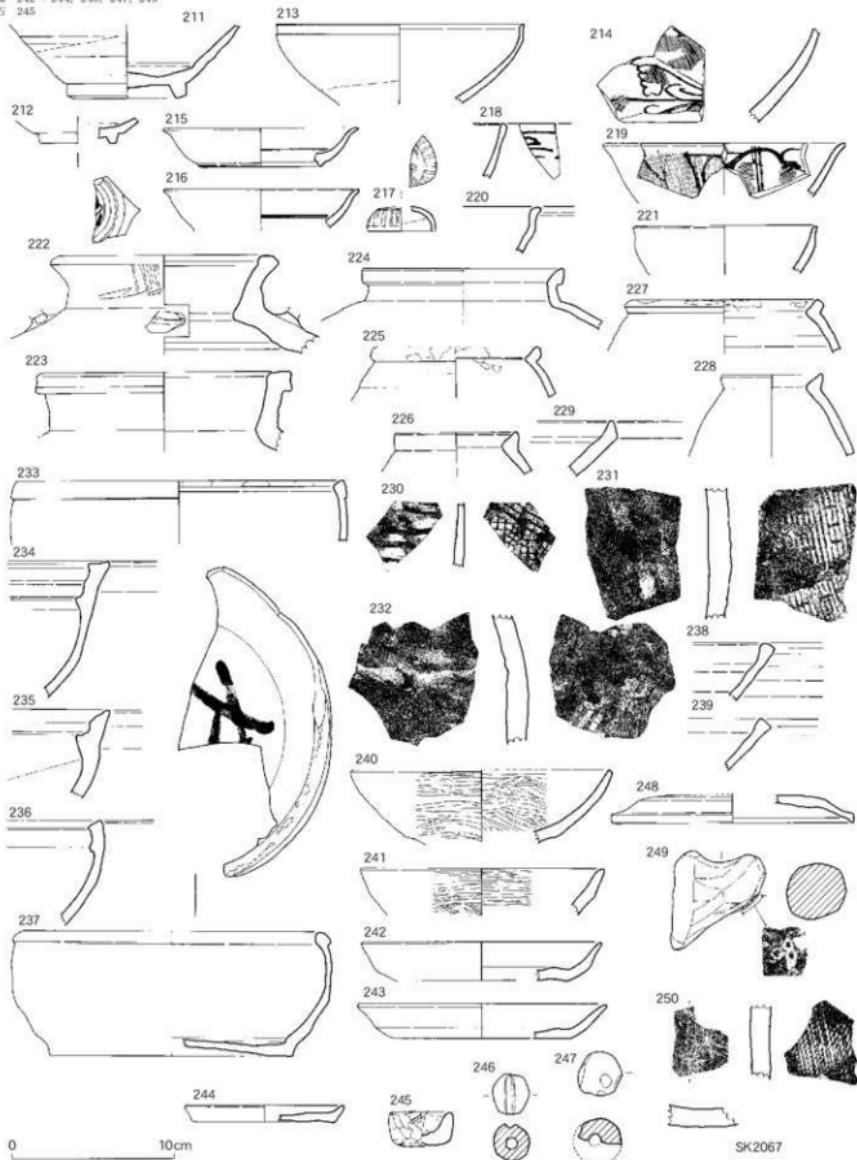
SK1046（第5図） II区西側に位置する方形の区画で検出時は東西4m、南北2.6m以上と推定したが、掘下げ中に周辺との境界が曖昧になった。複数遺構の切合い、もしくは下の遺構まで掘り抜いたものと思われる。出土遺物（第24図146～156）。12世紀頃と16世紀の遺物やサメ椎骨が出土した。146・147は青磁、148は白磁である。149は備前焼の陶磁鉢である。150～152は瓦質火鉢、153は瓦質の鉢である。154は須恵器平瓦で凸面は繩目タタキ。155は須恵質博で暗灰色を呈す。胎土は1～

朝鮮青磁 175
 染付 176, 177
 青磁 183, 196, 197
 白磁 186, 187, 202, 205 ~ 207
 陶器 189, 203, 204
 瓦器 185.
 瓦質 188.
 土器 178, 179, 184, 190 ~ 195, 198 ~ 201, 208 ~ 210



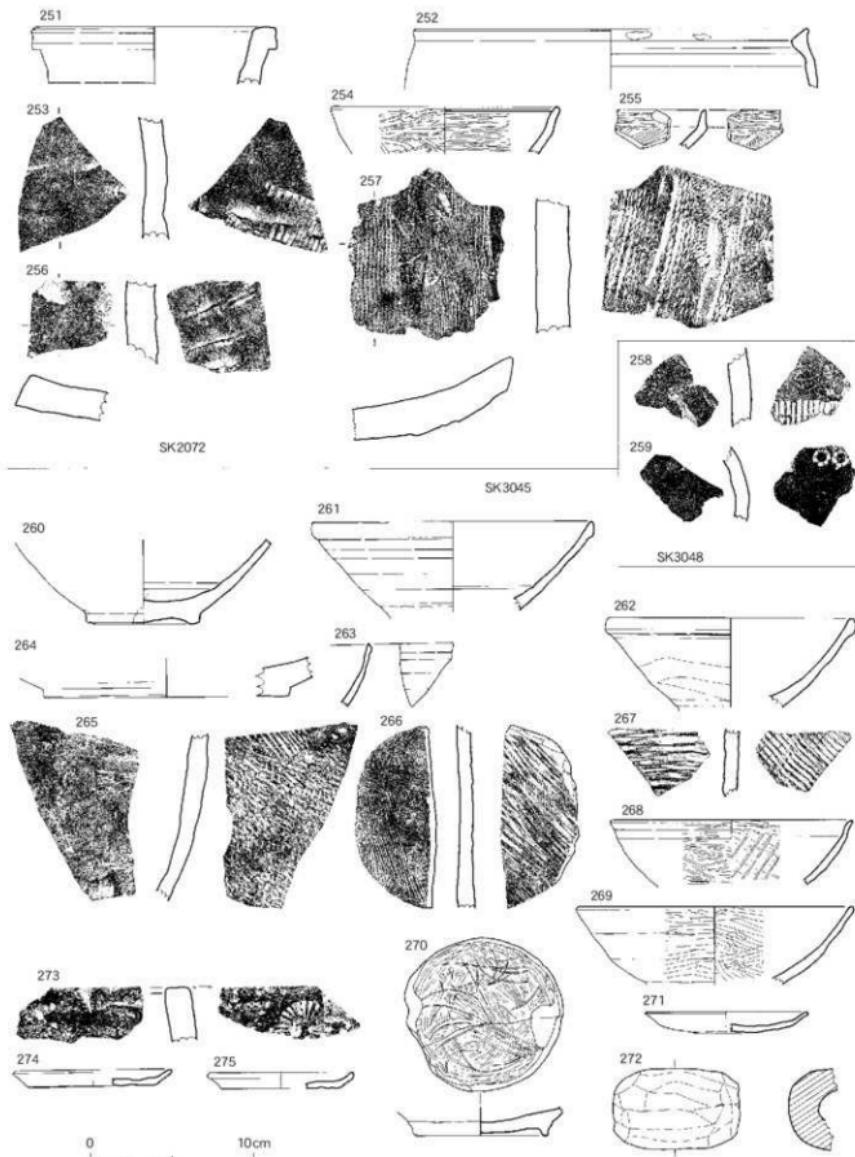
第25図 土坑出土遺物実測図3 (1/3)

侐付 215, 216
 白磁 211 ~ 214, 217
 青磁 218, 219
 天目 221
 陶器 220, 222 ~ 228, 231 ~ 237
 磁器 230, 238, 239, 246
 瓦質 240, 241
 土師 242 ~ 244, 246, 247, 249
 薄石 245



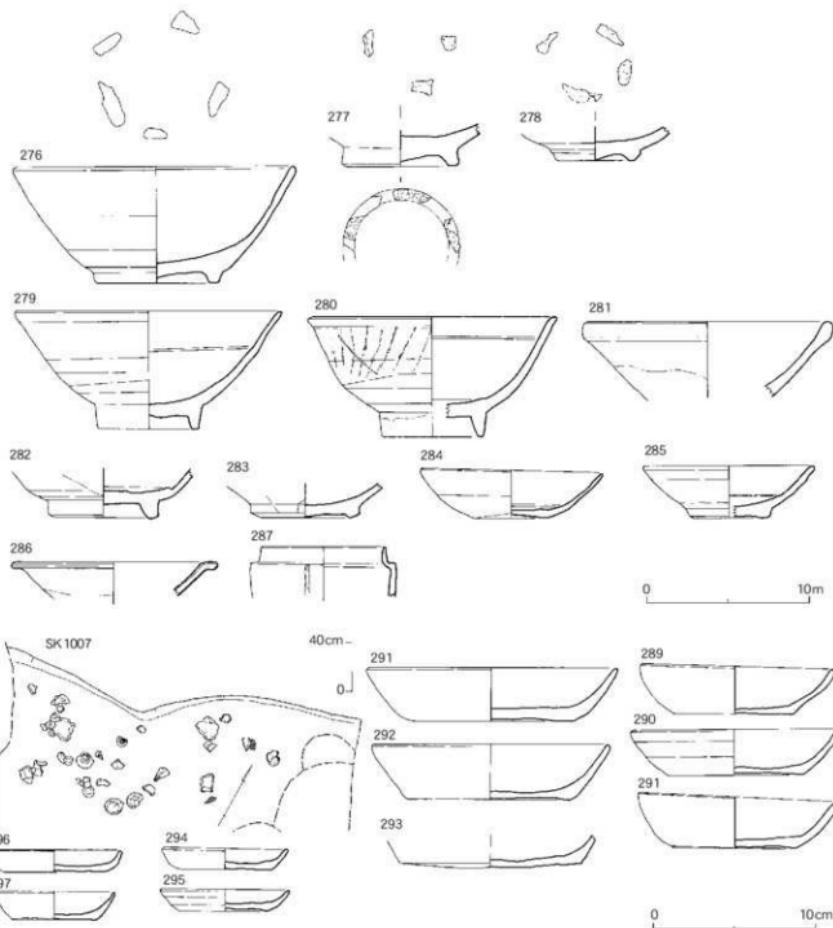
第26図 土坑出土遺物実測図4 (1/3)

白堜 251～253, 260～264,
 開口部 258, 265～267
 縞帶 256
 瓦質 254, 255, 259, 269, 270, 273
 上部 268, 271, 273, 274, 275



第27図 土坑出土遺物実測図5 (1/3)

青磁 276～278
1160 279～287
上絹 288～297 (全て系切0)



第28図 土坑・整地層出土遺物 (1/3)

2mmのスが多くみられ、また表面に小さな凹凸が多くみられるなど整形・調整は粗い。焼成は良好。156は巴文の丸瓦である。

SK1047(第19図) II区西側に位置しSE1048に切られる。平面は楕円形で長径87cmを測る。断面は西側にテラスを持つ逆台形型を呈し底径40cmを測る。遺物は小片のみで瓦質土器や土師質鉢から中世前半と考えられる。出土遺物(第24図157)は須恵質平瓦で凸面のタタキは複雑な格子文を呈す。

SK1048 (第19図) II区西側に位置する。SE1045に切られる。平面は不整長方形を呈し、現状で東西1.05m、南北1.15mを測る。断面は南側にテラスを持ち、北側は検出面からの深さ48cmを測る。テラスの際に沿って10~30cmほどの角礫がまとめて出土した。礫の分布はほぼ水平である。遺物は白磁碗V類や龍泉窯系青磁碗など11~12世紀頃の貿易陶磁が多いが、備前焼擂鉢小片や染付片も出土しており16世紀頃と考えられる。出土遺物（第24図）。158は土師質平瓦、159は瓦質火鉢口縁である。

SK1050 (第19図) II区西端に位置する。東側はSK1046に、西側はSD1054に切られ平面形は不明である。現状で幅95cm、深さ13cmを測る。断面は浅皿状で、底面は東側に緩やかに傾斜する。遺物は白磁IX類、白磁水注片、茶褐釉陶器片、瓦器碗などが出土しており14~15世紀と考えられる。

SK1051 (第21図) II区東側に位置しSE1052を切る。平面は楕円形を呈し径1.6m、深さ53cm、底径42cmを測る。断面は擂鉢状を呈す。遺物は12~13世紀の貿易陶磁（白磁皿III類、越洲窯系青磁片）の他に瓦質火鉢、長門・周防系瓦器鉢などが出土しており、14~15世紀と考えられる。その他、炉を築くときに使う素焼きの粘土ブロック（断面方形の棒状を呈し、1面のみ被熱して出土する）や羽口、炉壁、鉄滓など製鉄関連の遺物が多く出土した他に土製の鈴も出土した。出土遺物（第24図）。160は越洲窯系青磁碗で黄緑褐色を呈す。161は瓦質火鉢、162は瓦質鉢である。

SK1053 (第21図) II区中央に位置する南北方向に長い土坑でSE2068を切る。III区では確認できなかった。現状で南北2.4m、東西2.1mで検出面からの深さ67cmを測る。底面中央部と南端に木杭が打たれてるのは土留め用の杭か。時期は白磁IX類、白磁皿E-2類、土鍋等から14~16世紀である。出土遺物（第24図163~172）。163は陶器甕胴部でタタキ痕が残る。164は須恵質平瓦で凸面は格子状タタキ、凹面は布目压痕の上から粗いナデを施す。165は綠釉陶器片で器種は不明。胎土は赤褐色で釉は外面のみである。166は陶器鉢皿類で黄緑褐色を呈す。167は瓦質擂鉢である。暗褐色で内面にナデを施す。胎土は灰白で白色粗砂を少量含む。168・169は土師壺・皿でいずれも糸切りである。170は土師質で表面にスタンプを押す。器種不明。171は砥石、172は土鉢で灰褐色で表面に研磨を施す。

SK1057 (第20図) II区中央西寄りに位置し平面は楕円形で長径107cm、短径71cm、深さ28cmを測る。断面は東側にテラスを持つ浅皿状を呈す。出土遺物は白磁碗と同安窯系青磁片、陶器水注、土師壺・皿（糸切り）など12~13世紀が多いが時期不明の染付片が出土しており、時期的に降ると思われる。

SK1066 (第21図) III区に位置する。平面は東西に長い不整楕円形で長径2.1m、短径1.4m、深さ63cmを測る。覆土は灰褐色で20~30cmの礫や土器片、鉄滓を含む。炭化物小片を水平方向の層理状に多く含む。時期は染付、陶器大甕、瓦質擂鉢、瓦質火鉢等から近世である。出土遺物（第25図175~180）。175は高麗青磁碗か。178は土師質擂鉢である。全面黄褐色で胎土中に細砂を少量含む。179は糸切りの土師皿で口縁に1ヶ所煤が付着しており灯明皿として使用している。180は須恵器平瓦である。

SK1074 (第21図) III区西南隅に位置する。遺構は不整円形を呈し深さ35cmを測る。時期は瓦質火鉢や土鍋片から14~15世紀である。出土遺物（第25図181・182）。181は土師皿で復元口径11cmを測る。淡褐色を呈し底部は糸切りである。182は瓦質火鉢で突帯間に「×」字のスタンプを押す。

SK2021 (第20図) I区西側に位置しSK2048に切られる。平面形は不明で現状で深さ35cmを測る。遺物はいずれも小片である。中世後半か。出土遺物（第25図183~185）。183は龍泉窯系青磁碗で灰緑色を呈す。胎土は灰色である。184は土師碗。185は須恵質瓦で凸面は繩目压痕、凹面は端から1.5cmを削って平坦面を作る他は布目压痕である。

SK2030 (第6図) I区中央部に位置する。平面は不整形で1段下げて消滅した。出土遺物（第25図

186～188図)。186は白磁碗V-1類で釉は青緑を帯びた灰白色である。187は白磁皿で釉は黄味を帯びた灰白色で外底部のみ丁寧に搔き取る。188は瓦器楕である。灰～黒色を呈し胎土に砂を少量含む。

SK2035(第20図) I区に位置し北側をSK1027に切られる。平面は東西に長い楕円形で長径124cm、深さ21cmを測る。底面からやや浮いて白磁碗IV・V類や黒色土器B類楕、瓦器楕等が出土した。12世紀前後か。出土遺物(第25図189～195)。189は陶器鉢I-1b類口縁である。190・191は土師坏、192～195は土師皿である。190と193がヘラ切りによる切り離しで他は糸切りである。

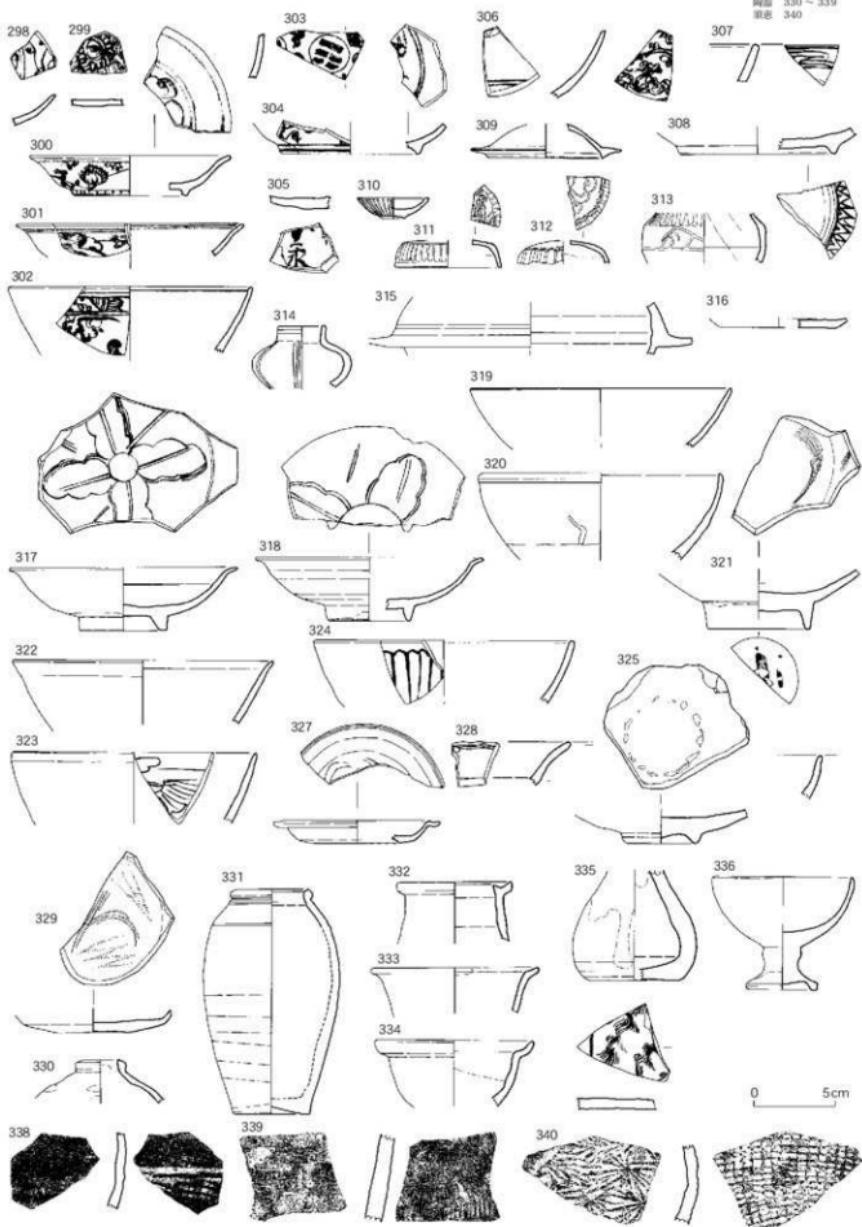
SK2051(第20図) I区中央部に位置する。SP2043とSP2044に切られる。平面は楕円形を呈し長径58cm、深さ23cmを測る。遺物は同安窯系青磁碗が2個体分と土師坏(糸切り)が出土した。出土遺物(第25図196～199)。196・197は同安窯系青磁碗である。198・199はいずれも糸切りによる切り離しで板状圧痕がみられ、赤みを帯びた黄褐色を呈す。胎土は198が白色砂を多量に、199は細砂を少量含む。

SK2067(第22図) II区西側に位置する東西方向に長い隅丸長方形で主軸をN-61°-Eにとる。長径590cm、幅260cm以上、深さ198cmを測る。遺構西側底面は東側へ降る階段状を為す。地下室か。遺構周辺は大型の遺構が切り合っており、本遺構も1面目の遺構検出で検出したSK1046と同一遺構の可能性がある。遺物としては遺構一覧表に記載した様に多種の遺物が出土した。遺物の大半は12～13世紀であるが、白磁碗IV類など14世紀の遺物や若干16世紀から近世の遺物も出土した。遺構の時期は長軸が現地割りに沿っていることから遺構の時期が太閤町割以降に降る可能性が高いと考えられる。出土遺物(第26図211～250)。211～214は白磁碗である。211・212はIV類碗底部で211はやや緑を帯びた淡灰色、212は黄色を帯びた灰白色を呈す。213は白磁碗、214は龍泉窯系青磁鉢、215・216は染付皿で口縁端と疊付の釉を搔き取る。色調は215が淡灰色で内面見込近くに薄い染付がみられる。216は白色で淡青色2条の染付を施す。217は白磁合子蓋。218・219は青磁碗、220は陶器碗、221は天目碗である。218は青磁碗で口縁下に雷文を施し、220は碗もしくは鉢で釉は少し緑を帯びた褐色、胎土は青灰色で白・黒色粒を少量含む。222～224は陶器壺口縁である。222は横耳で根本部分のみ遺存、釉は明赤褐色を呈す。内面頭部より下は露胎である。223の釉は暗褐色を呈し内面は頭部より上は部分的な施釉、下は露胎である。胎土は灰色で白・黒粒を多く含む。224は明褐色に淡黄褐色が斑状に混じる。胎土は淡灰色で白・黒色粒多い。225～228は無頭陶器壺229は須恵質鉢である。230は須恵器甕、231・232は陶器甕、233～237は陶器鉢、238・239は須恵質鉢である。240・241は瓦器楕、242～244は糸切りで板状圧痕がある。245は滑石製容器で内外面に粗い削り痕が残る。246・247は土鍾である。246はほぼ完形で外面片方にのみ溝を刻む。248は須恵器坏蓋で外面は黒色、内面は灰色を呈す。胎土は砂を少量含み焼成は良好である。249は土師質の瓢取手である。外面下側に竹管状のスタンプを押す。250は須恵質平瓦である。凸面に繩目圧痕、凹面は布目圧痕がみられる。

SK2072(第21図) II区中央南側に位置しSK2067に切られる。平面形は不明、現状で深さ90cmを測る。遺物は白磁碗IV・V類、白磁壺Ⅲ・Ⅶ類、龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁皿の他に常滑焼の甕や楠葉型瓦器楕が出土するなど国内遠隔地の土器が多く出土している。遺構の時期は12世紀後半と考えられる。出土遺物(第27図251～257)。251は褐釉陶器甕。胎土は淡赤褐色で白・黒色粒を多く含む。252は陶器鉢III-1類か。緑黄～暗褐色を呈し胎土は淡赤褐色を呈す。253は常滑の甕、254・255は瓦器楕、256・257は須恵質瓦で256は凸面は粗い斜格子である。257は繩目圧痕で白色砂を多く含む。

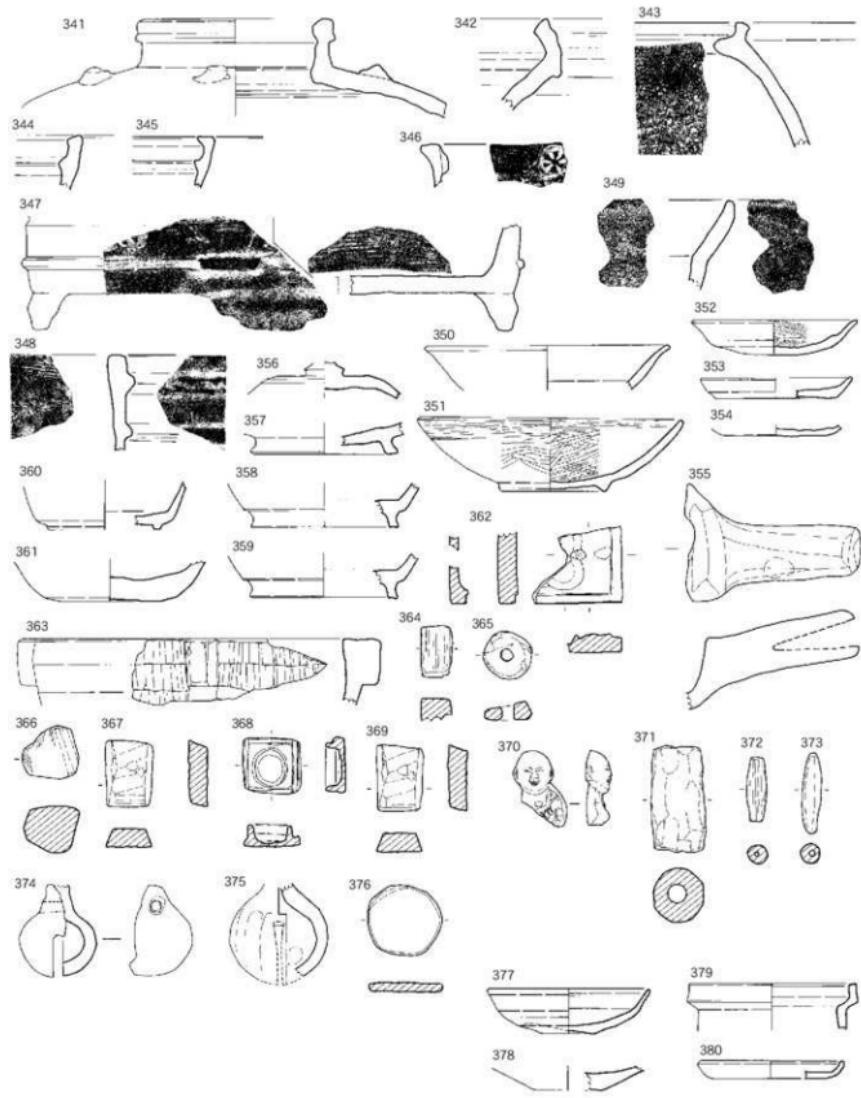
SK2081(第20図) III区北東隅に位置する。平面形は不明、現状で深さ27cmを測る。埋土中から土

焼付 298 ~ 308
 青磁 322 ~ 325
 白磁 309 ~ 321, 327 ~ 329
 天目 326
 陶器 330 ~ 339
 瓦 340



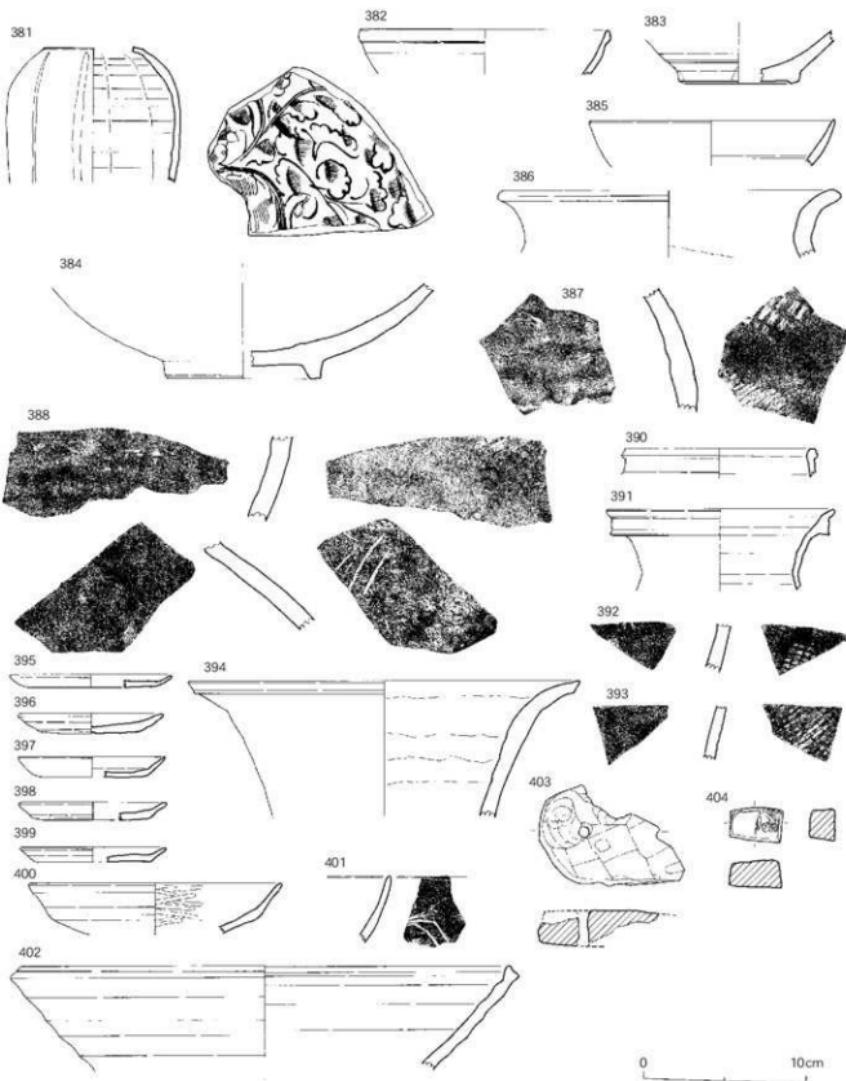
第29図 第1～2面間出土遺物実測図1 (1/3)

- 青銅 378
 白銀 377
 陶器 341 ~ 345, 379
 瓦質 346 ~ 348, 351
 銀鏡 356 ~ 361
 土師 349, 350, 352 ~ 355, 371 ~ 376, 380
 石製品 (龍灰岩) 362
 磐石 363 ~ 369
 土製品 370



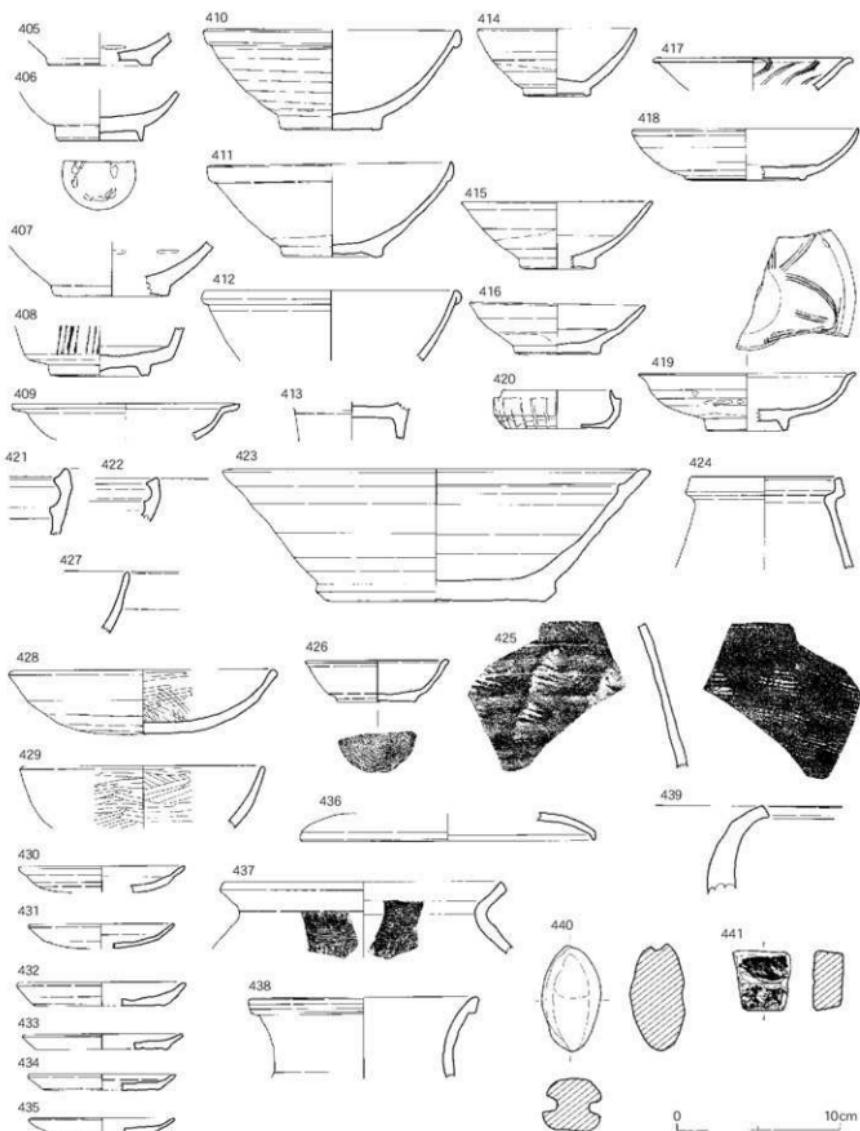
第30図 第1~2面間出土遺物実測図2 (1/3)

白絹 381 ~ 384
陶器 385 ~ 390
漆器 391 ~ 393, 402
瓦質 394, 401
土質 395 ~ 400
磨石 403, 404

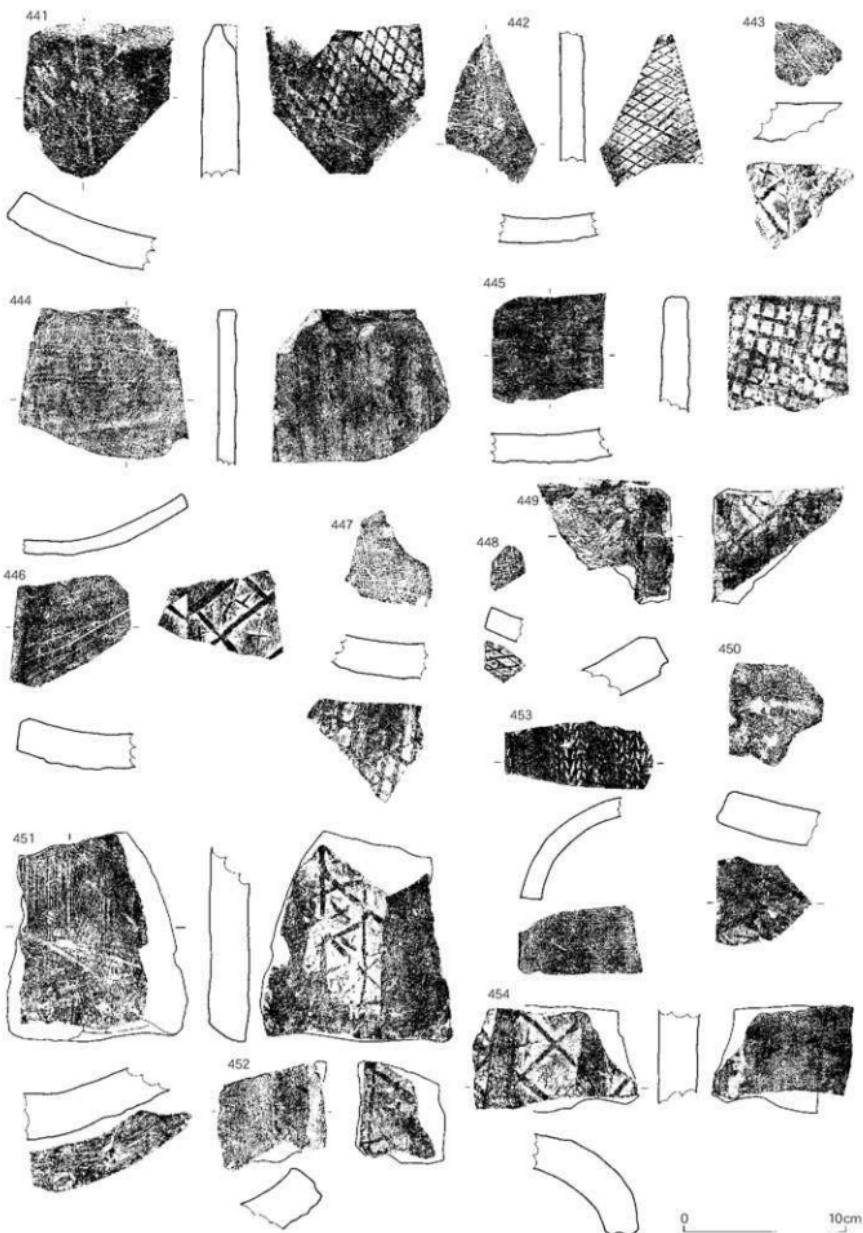


第31図 第2~3面間出土遺物実測図 (1/3)

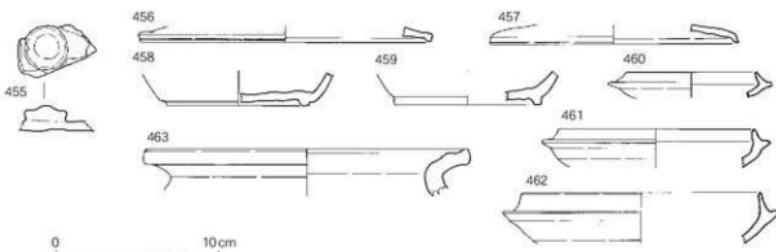
青磁 405～409
 白磁 410～420
 陶器 421～425
 瓦器 426, 436～439
 瓦質 427, 429
 上絹 428, 430～435, 440
 前石 441



第32図 第3面下出土遺物実測図 (1/3)



第33図 包含層出土瓦実測図(1/3)



34図 出土須恵器実測図 (1/3)

師皿と坏が1枚ずつと白磁碗片が1点出土した。土師坏と皿は底部糸切りである。その他に同安窯系青磁皿が出土しているが外底部全面には墨が付着しており、硯の代わりとして使用されたものである。遺構の時期としては12世紀後半頃と考えられる。

SK2084(第20図) Ⅲ区南側に位置する。平面形は円形で径42cm、深さ10cmほどの柱穴状遺構であるが底面から白磁碗IV類が出土した(第25図202)。白磁碗は口縁の1/4程が欠損しているが、完形に近く本遺構に伴う遺物であると考えられる。遺構の時期は11世紀末から12世紀前半である。

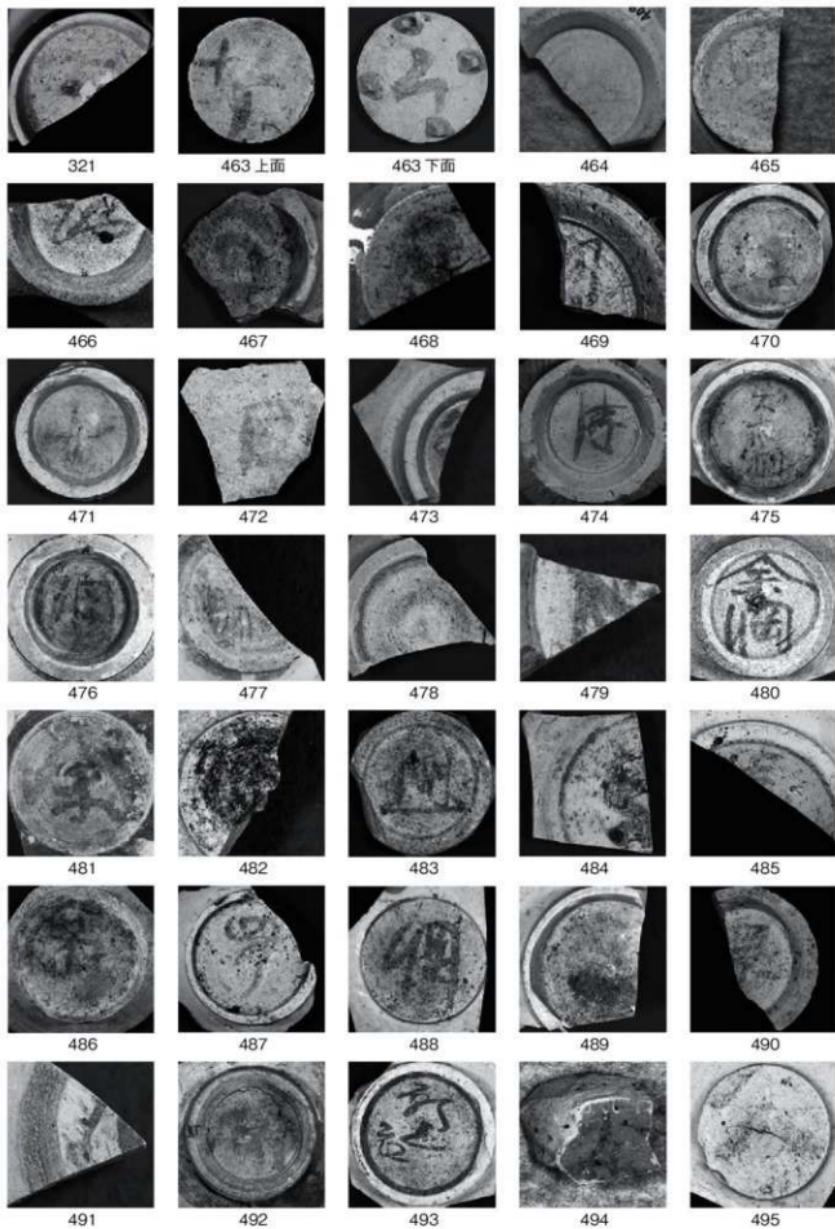
SK2089(第6図) Ⅲ区南西側に位置する。図面ではSX3046の掘方右側に位置する。掘込みは確認できず。3046上に被さる堆積土中から土師坏・皿と白磁合子等が出土した。出土遺物(第25図203~210)。203・204は陶器鉢である。203はⅢ-1類で軸は緑を帯びた暗褐色を呈す。206は白磁合子蓋、207は合子身である。208~210はいずれも糸切りで板状圧痕がみられる。黄褐色もしくは淡褐色を呈す。

SK3045(第21図) I区西端に位置しSE2047とSK3048に切られる。平面形は方形と思われるが、切り合いが多く規模は不明である。現状で深さ60cmを測り、底面は中央部がやや深い。出土遺物(第27図260~275)。260~263は白磁碗である。264は白磁盤で高台直上まで釉を施す。釉は黄~緑をわずかに帯びた灰白色、胎土は灰白~黄白色で黒色微粒子を含む。265~267は須恵質甕胴部である。265は外面はタタキ、内面は指ナデを施す。266は外面黒色、内面灰色、267は外面黒色を呈し、薄い自然釉がかかる。胎土中に白色砂を少量含む。268は土師椀で黄褐白色を呈す。外面と口縁は横方向のミガキ、内面は斜め方向のミガキを施す。269は瓦器椀である。外面褐色で横ナデ後部分的に横方向のミガキ、内面は部分的にミガキを施す。270は黒色A類椀底部である。271はヘラ切りで淡灰褐色~淡褐色を呈す。273~275は遺構上層部から出土した。273は瓦質火鉢、274・275は土師皿で274はヘラ切り・板状圧痕、275は糸切り。272は土錐で暗灰褐色を呈し1mm程の白色砂を多く含む。

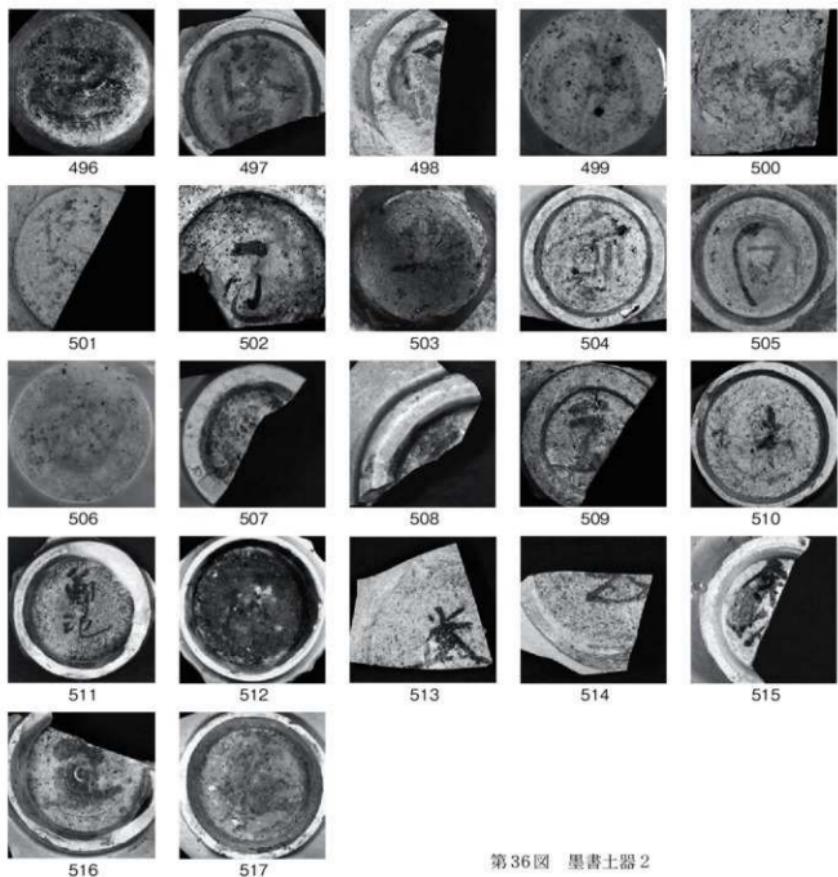
SK3048(第22図) I区西端に位置する。平面は方形に近く一辺約110cmを測り、断面は逆台形で検出面からの深さ42cmと底径68cmを測る。覆土は灰茶褐色で黒褐色土と暗黃褐色土の小ブロックと炭化物の粒を全体的に含む。上層では白色砂を多く含み、中層以下ではやや少くなるが、変化は漸移的で明確ではない。時期は瓦質火鉢等から中世後半と考えられる。遺物は12世紀前後の貿易陶磁や古代の瓦片や壇なども出土した。出土遺物(第27図258・259)258は常滑の大甕片である。灰~灰褐色を呈し胎土は灰色で細砂を少量含む。259は瓦質火鉢である。竹管状のスタンプを施す。

表1 墓書土器一覧

遺物番号	出土遺構	墨書き内容	土器	部分	時期
463上面	1022	「+□」		上面	不明
463下面	1022	記号か		底面	不明
464	1042	不明	白磁碗X I類か	外底部	10C後半～11C中
465	1052	不明	白磁盤VII-2b	外底部	11C後半～12C前半
466	1063	花押か	白磁盤VII-2b	外底部	11C後半～12C前半
467	1066	織巻き文	白磁碗V類	外底部	11C後半～12C前半
468	1071井筒	不明	白磁盤	外底部	
469	1073	不明	白磁碗V類か	外底部	12C中頃～後半
470	2061	「高」+花押か	白磁耳壺	外底部	11C後半～12C前半
471	2063井筒	「+」か	白磁碗V類	外底部	11C後半～12C前半
472	2066	「国吉」か	陶器盤I型	外底部	11C後半～12C前半
473	2066・2067	不明	白磁盤III類か	外底部	12C中頃～後半
474	2072	花押か	同安窯系青磁碗	外底部	12C中頃～後半
475	2075	「久口綱」	白磁碗VII類	外底部	12C中頃～後半
476	SX3046	「綱」	白磁鉢	外底部	11C後半～12C前半か
477	SX3046	「口綱」か	白磁盤V類	外底部	11C後半～12C前半か
478	SX3046	記号か	白磁碗X I類か	外底部	10C後半～11C中か
479	SX3046	不明	白磁碗	外底部	
480	SX3046	「余綱」	白磁小碗	外底部	11C後半～12C前半か
481	SX3046	「余」	白磁盤VI類か	外底部	11C後半～12C前半か
482	SX3046	不明	白磁盤VI類	外底部	11C後半～12C前半
483	SX3046	花押	白磁盤	外底部	
484	SX3046	不明	白磁盤	外底部	
485	3045下白色砂	不明	白磁碗X I類?	外底部	10C後半～11C中
486	I区埴土面～2面削下げ	「仁」	白磁碗IV類	外底部	11C後半～12C前半
487	I区埴土面～2面削下げ	「四夕」か	白磁碗	外底部	
488	I区2～3面削下げ	「綱」	白磁盤	外底部	11C後半～12C前半
489	II区整地面上の黒褐色土	不明	白磁碗V類	外底部	11C後半～12C前半
490	II区トレンチ下削	「風」	白磁碗	外底部	11C後半
491	II区トレンチ白色砂下里ドベ	不明	白磁盤VI類	外底部	11C後半～12C前半
492	II区トレンチ西端里ドベ	「綱」か	白磁盤	外底部	11C後半～12C前半か
493	II区トレンチ壁	不明 漢字2文字	白磁碗VI類	外底部	11C後半～12C前半
494	III区1面下整地層	不明	赤褐釉陶器片	外底部	
495	III区2面～黒色土間整地層	「八」		外底部	
496	III区2面～黒色土間整地層	「三」か	陶器壺	外底部	
497	III区2面～黒色土間整地層	「陳口」	白磁碗	外底部	11C後半～12C前半
498	III区2面～黒色土間整地層	不明	白磁碗	外底部	
499	III区2面～黒色土間整地層	不明	白磁盤VI-2類	外底部	11C後半～12C前半
500	III区2面～黒色土間整地層	記号か	白磁碗IV類	外底部	11C後半～12C前半
501	III区2面～黒色土間整地層	不明	白磁盤VI-1b	外底部	11C後半～12C前半
502	III区2面～黒色土間整地層	不明 漢字1文字	陶器甕	外底部	13世紀か
503	III区2面～黒色土間整地層	不明 漢字2文字か	陶器壺	外底部	
504	III区2面下整地層	不明	白磁碗VI類か	外底部	11C後半～12C前半
505	III区2面下整地層	記号か	白磁碗	外底部	
506	III区2面下整地層	不明	白磁盤	外底部	
507	III区2面下整地層	不明	白磁小碗	外底部	11C後半～12C前半
508	III区2面下整地層	不明	鹿泉窯系青磁碗I類	外底部	12C中頃～後半
509	III区2面黒褐色土間整地層	不明	白磁盤	外底部	11C後半～12C前半
510	III区2面黒褐色土間整地層	「わ」か	白磁碗V類	外底部	11C後半～12C前半
511	III区黒色土中	「鄭記」か	白磁碗	外底部	11C後半～12C前半か
512	III区黒色土中	「二娘」か	白磁碗V-4C	外底部	12C中頃～後半
513	III区黒色土中	花押か	白磁盤	外底部	
514	III区黒色土中	不明	白磁盤	外底部	
515	III区黒色土下	「余綱」	白磁碗V類か	外底部	
516	整地削下埋立土	不明	白磁小碗	外底部	11C後半～12C前半
517	人口側トレンチ	「莊」	白磁碗V-4類	外底部	12C中頃～後半
321	II-1区2～3面削下げ(主として黄褐色整地層)	不明(P35に図あり)	白磁碗V-4b類	外底部	12C前半



第35図 墨書き土器 1

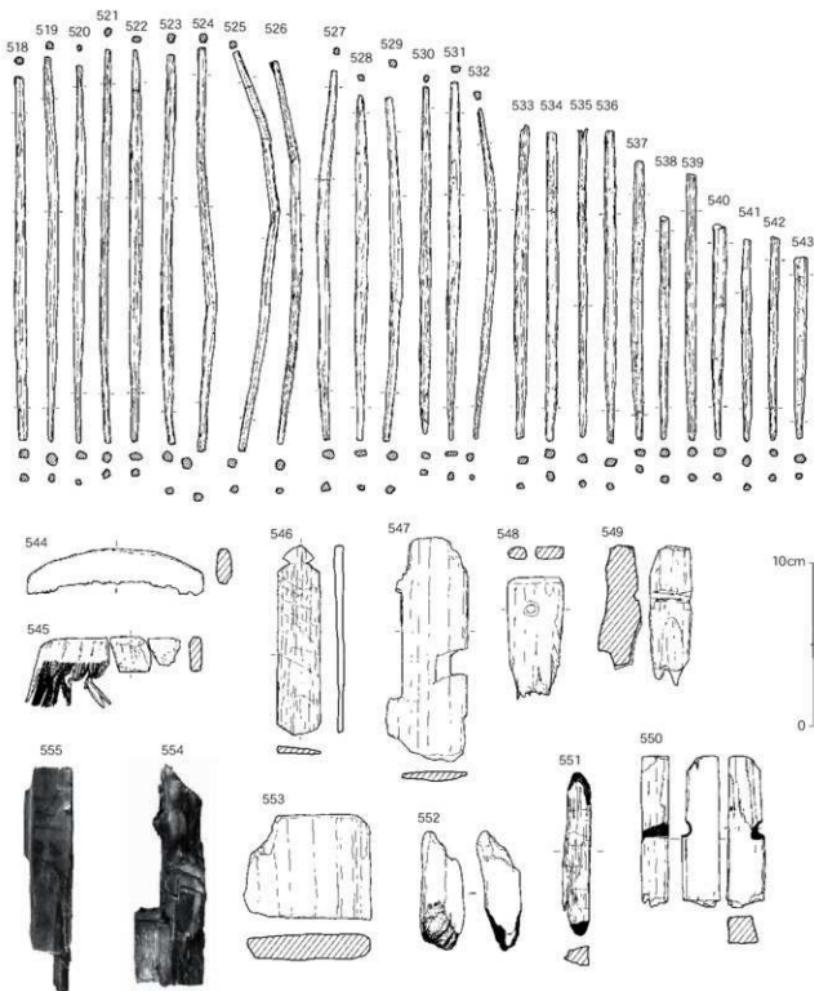


第36図 墨書土器2

4) その他の遺構

SX2053 (第20図) I区中央部に位置する。土師壺が4枚まとまって出土したが、掘方は検出できなかった。これらの土器は焼土ブロック整地層下の整地層の一部である黄褐色土上面に貼りつくような状態で出土したため、上からの掘り込みではなく整地中の祭祀もしくは廃棄と考えられる。土師壺はR1とR2が下向き、R3とR4が上向きの状態で出土した。いずれも底部切り離しはヘラ切りである。このうち2点は遺存状態が悪く図化できなかった。出土遺物（第25図196・197）は土師壺で196が口径14.2cm、197が復元口径13.8cmを測る。口縁は横ナデ、内面はミガキを施す。この土師壺の時期からも焼土ブロック整地層より下層の整地の時期は12世紀前半頃であることが判る。

SX1007 (第28図) I区東端に位置する。土師壺6枚以上と土師皿4枚以上、その他同安窯系青磁や陶器片が出土した。これらは遺構ではなくSK2053と同様に整地層中の祭祀、廃棄と思われる。土師壺・土師皿共に底部切り離しはすべて糸切りで板状圧痕がみられる。明らかにSK2053とは時期差が



第37図 出土木器実測図 (1/3)

みられる。1～2面間で検出した焼土ブロックを多量に含む整地層下面がある時期地表面となっていた時期があり、火災後焼けて使えない土壁の建物を壊してならした後、その上に整地を行ったため、焼土の上と下で時期差が生じたものと思われる。出土遺物（第28図288～297）。288～293は土師壺である。いずれも淡褐色から淡黄褐色を呈す。294～297は土師皿である。黄褐色や淡赤褐色を呈し砂を少量含む。

SX3046（第22図）Ⅲ区西端に位置する。埋土は暗褐色土で、間に白色砂層を含む。白磁碗等の土器片の他、多量の木片、獸骨、人骨が出土した。出土状況から波打ち際に近い場所にあたり、東側から多量のゴミを投棄したものと思われる。間に数層の白色砂層がみられ、白色砂層から踏み込んだ足跡も見られるため、岸に近い窪みにゴミを廃棄したものと考えられる。出土した遺物は白磁碗IV類片が多く、墨書き土器も10点と多く出土した（表1 476～485）。白磁皿の他11世紀の土師楕や黒色土器A・B類や土師皿（ヘラ切り）など11世紀代と考えられる遺物が多い。木片は木器も多く含んでおり、最も多く出土したのは箸で完形品も15点出土しているほか、破損品は多量に出土している。その他に櫛、荷札、板草履、火鉢臼等の木製品が出土しているほか、鼻縁りと思われる木片や鉢（手斧か）による削りカスが出土していることから、海岸縁で製材作業を行っていたことが判り、聖福寺古図を彷彿とさせる。獸骨に関しては後述するが、ウシ、ウマ、イヌなどが解体された状態で出土した。この有機物を多く含む層は西側と南側にまだ広がっておりいたが、出入口やユニットのスペース確保等の事情で調査できなかつたのは残念である。出土遺物（第28図276～287）。276～278は青磁碗である。見込みと疊付きに目痕がある。279～283は白磁碗、284～286は白磁皿、287は白磁の無頭壺である。

5) 整地層出土遺物（第29～34図 298～441）整地層掘下げ時に出土した遺物である。焼土ブロック整地層はI区では1面と2面間にあるため1～2面間出土遺物は若干焼土ブロック整地層下の遺物を含む。2～3面間掘下げは整地層下層、3層下は埋立てもしくはそれ以前に廃棄された遺物である。若干新しい遺物を含むのは柱穴状構造などの見通しに原因があるものと思われる。また各層から古墳時代や古代等埋立て以前の遺物が出土しているのは地下鉄祇園駅付近など弥生時代以降の集落等が確認されている地点の土を埋立てに使用したためと思われる。第33図は整地層出土瓦である（441～454）。いずれも須恵瓦である。454・455は丸瓦で他は平瓦である。タキは格子、斜格子、繩目で、444のようにナデ調整を施すものもある。凹面は布目、ケズリ、ナデである。いずれも古代に属する。443や446、450～452、454など粗い斜格子の中に「×」印などがある瓦は鴻臚館でも出土しており、最近の調査では西区生の松原の斜ヶ浦瓦窯社で「警固」銘瓦とともに出土している。この瓦は箱崎遺跡でも出土しており、博多湾岸に分布する大宰府関連施設に広く供給されていたことが判明している。須恵器（第34図455～462）。古墳時代後期と7～9世紀の2時期の須恵器が多く出土した。古代の須恵器については瓦同様東側に存在した官衙に伴う遺物。古墳時代遺物は博多濱東側に分布する古墳に伴う可能性がある。

6) それ以外の遺物

(1) 墨書き土器（第35・36図・表1）調査区全体で59点の墨書き土器が出土した。463は上下両面に書かれているが、後の58点は外底部に墨書きされている。一覧表に記載しているとおり、内容が判明するものは少数である。姓と思われるものが「余」、「莊」、「鄭」、「陳」、「吳」、「國吉」など6点、「綱」が3点、人+綱が「余綱」、「久■綱」など4点、花押と思われるものが5点出土した。特に「余」は名前と綱との両方で出土した。調査面積の割に墨書き土器の点数が多い。綱や姓などの墨書き土器は船荷の帰属を示す為に書かれたと考えられており博多を象徴する遺物であるが、船着き場に近い考えられるされる当調査区からの出土遺物としてふさわしいものである。

(2) 木製品(第37図) 518~543は箸である。SX3046から出土した。破片がパンケースで2箱分ほど出土している。518~532は完形で長さ21~24cm、太いものでは径7mmを測る。どれも粗い面取りで両端を若干細く削る。544・545は櫛である。544はSE1071の井筒最下層の出土で、歯は全て折れて柄のみである。柄は長さ10.8cm、幅2cm、厚さ1cmを測る。歯は痕跡から根本部分の幅が1mm前後を測る545はSE2047井筒から出土した。歯が一部残っているが薄いため土圧で折れ曲がっている。片方の端部が断片化しており現状で長さ8cm強、柄の幅1.5cm、厚さ7mmを測る。歯の長さは3cm弱を

表2 遺構別出土銭一覧

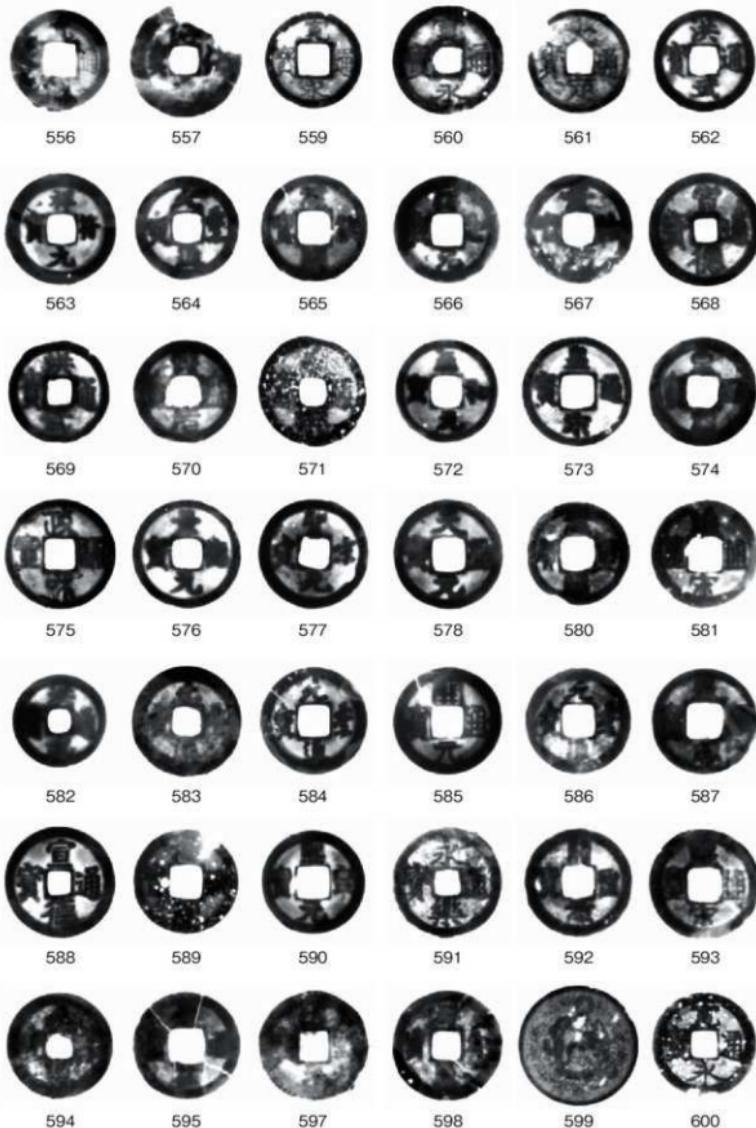
遺物番号	出土遺構	銭 銘	備 考	遺物番号	出土遺構	銭 銘	備 考
556	1002・焼土	寛永通宝	新寛永	579	2074 井筒	□□□□	
557	1013	淳化元寶		580	2074 井筒	元豐通寶	
558	1051	□×□寶	1/4 欠損	581	2074 井筒	皇宋通寶	
559	1056 井筒	寛永通宝	新寛永	582	2074 井筒	洪武通寶	小型
560	1063	寛永通宝	古寛永	583	2074 井筒	元豐通寶	
561	2068 井筒2段目	大定通寶	井筒内挿着	584	2074 井筒	元豐通寶	
562	2074 井筒	洪武通寶		585	2074 井筒	開元通寶	
563	2074 井筒	祥符元寶		586	2074 井筒	元豐通寶	
564	2074 井筒	元豐通寶		587	2074 井筒	皇宋通寶	
565	2074 井筒	元□□寶	元符通寶か	588	2074 井筒	宣德通寶	
566	2074 井筒	紹聖元寶		589	2074 井筒	元□□寶	
567	2074 井筒	景祐通寶		590	2074 井筒	熙寧元寶	
568	2074 井筒	宣德通寶		591	I区1面検	永樂通寶	
569	2074 井筒	洪武通寶		592	I区3面検	紹聖通寶	
570	2074 井筒	熙寧元寶		593	I区焼土面～2面掘下げ	皇宋通寶	
571	2074 井筒	永樂通寶		594	I区ベルト	元□□寶	
572	2074 井筒	至和元寶		595	II区トレンド	景祐通寶	
573	2074 井筒	皇宋通寶		596	III区1面下整地層	□□□□	
574	2074 井筒	皇宋通寶		597	III区1～2面掘下げ	紹聖元寶	
575	2074 井筒	政和通寶		598	III区2面～黒色土間整地層	祥符通寶	
576	2074 井筒	景德元寶		599	埋土中	近代銭 一銭	
577	2074 井筒	聖宋元寶		600	表探査区外	寛永通宝 古寛永	
578	2074 井筒	天聖元寶					

ゴシック体はFigあり。 □：判読不能 ×：欠損

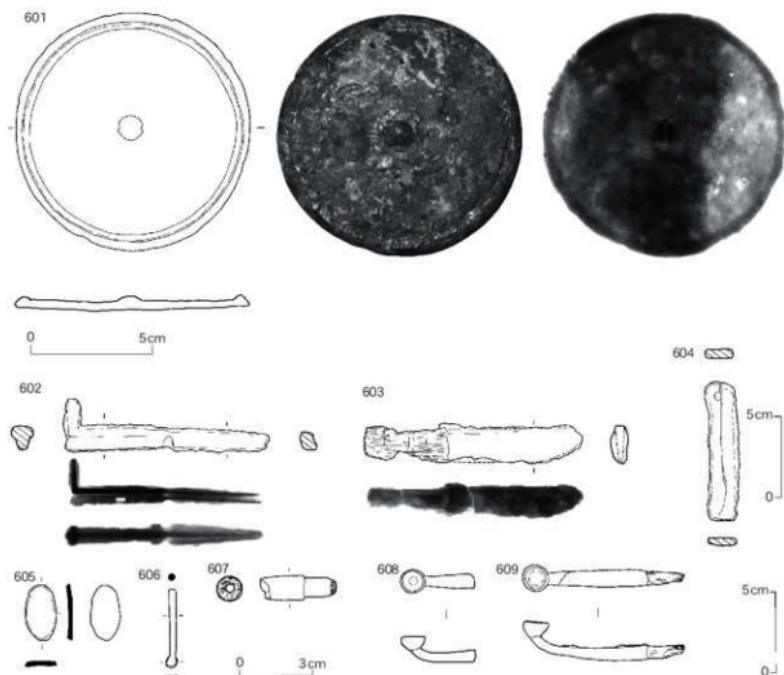
表3 銭種別一覧

銭 銘	初鑄年	時代	枚数	銭 銘	初鑄年	時代	枚数	銭 銘	初鑄年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	1	熙寧元寶	1068	北宋	2	宣德通寶	1433	明	2
淳化元寶	990	北宋	1	元豐通寶	1078	北宋	5	寛永通宝(古)	1636	江戸	2
祥符通寶	1002	北宋	1	紹聖元寶	1094	北宋	2	寛永通宝(新)	1668	江戸	2
景德元寶	1004	北宋	1	紹聖通寶	1094	北宋	1	近代銭(一銭)	明治6年	明治17年	1
祥符元寶	1008	北宋	1	聖宋元寶	1101	北宋	1	欠損			1
天聖元寶	1023	北宋	1	政和通寶	1111	北宋	1	判読不能			5
景祐通寶	1034	北宋	2	大定通寶	1178	金	1				
皇宋通寶	1039	北宋	5	永樂通寶	1368	明	2				
至和元寶	1054	北宋	1	洪武通寶	1368	明	3				

計45枚

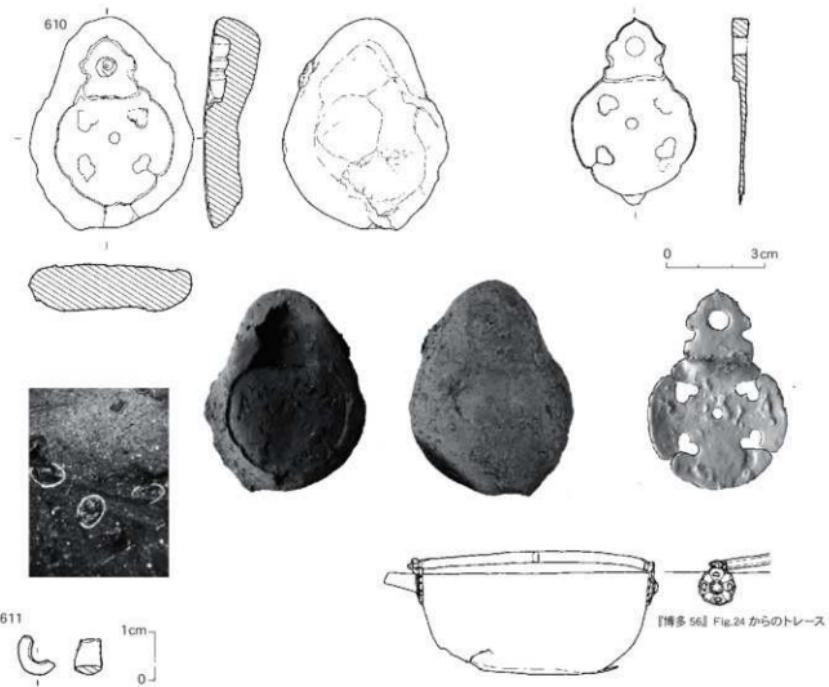


第38図 出土銭の透過X線画像



第39図 金属器実測図

測る。546はSX3046から出土した荷札である。下側が欠損しており、現状で長さ11.5cm、幅2.6cm、厚さは最大5mm強を測る。文字は確認できない。547はSE2074掘方から出土した板状の木片で現状で長さ13.7cm、幅4.9cm、厚さ5mmを測る。先端が弧状を描き板草履の破片と思われる。548・549はⅢ区黒色土中から出土した。548は長さ7.4cm、厚さ8mmの板である。端部に径8mmの孔を両側から穿つ。549は角材端から3cm離して幅8mmの溝を彫っている。溝から1cm離して材の中心部だけ緩やか弧状を描くように彫り下げており、窪んだ部分は黒く焦げている。550はSX3046から出土した火錐臼の破片である。縁部に径8mmの半円形の穴が開いており、中は黒く焦げている。551・552は燃えさしである。551はⅢ区黒色土中から出土し長さ9.8cmを測る。両端が焦げる。552はSX3046から出土し、片側が焦げる。どちらも丁寧な面取りなどは行っていない。燃えさしは他にも出土しているが、角材や棒状のものが多い。箸が多く出土しているが、燃えかけのものはみられない。553はⅢ区検出面で出土した。左側が折れているが現状で長さ7.8cm、幅6.4cm、厚さ1.5cmを測る。上下端は直角に面取りしているが、右端は丸く半円状を呈す。554は長さ17cm、幅5cmを測る。抉りがはいるが粗く刃物痕が残る。鼻縁りと思われる。555は87×37×15mmの木材で厚みは少し欠けており本来20mm程あったと思われる。片面に墨書きが見られる。文字は2文字以上で「主器」のようにも見えるが2文字目は不確定



第40図 土製鋳型、ガラス小玉実測図

である。図版14-6は薄い木片で長さ11.5cm、幅3.5cm、厚さ1mmを測る。槍鉤もしくは手斧により削られたもので、多量に出土した。これと554が出土することから建築用の木材を海岸近くで加工して、その削り屑を廃棄した事が判る。聖福寺古団に元寇防壁の外側の浜辺で木材を加工する大工達が描かれているが、これらの遺物はその情景を彷彿とさせるものである。

(3) 銅製品 (第39図)

銅錢 (第38図、表2・3) 45枚が出土した。北宋錢が多いのは他の調査地点と共に通するが明錢も7枚と比較的多い。2074の井筒からは29枚が出土しているが一部は鋲着していた。また、561はSE2068の井筒木桶が重なった間から出土した。これは箱崎遺跡第51次調査(福岡市埋蔵文化財調査報告書第952集)でもSE1007の井筒木桶が重なった部分に木片を差し込んだ隙間から銅錢3枚が出土した。これらは井戸における祭祀と思われ、14世紀頃にある程度広まっていたと考えられる。

和鏡 (第39図601) はSE2063の井戸底部から出土した。祭祀か。径9.7cm、重量139.7gを測る。鏡縁は蒲鉾状の半円形を呈す。鉤は径1.0cmと小さく、鉤孔は径2mm程度である。X線写真では鉤の左側に長方形の区画がみえ、銘があった可能性もあるが遺存状態が悪く詳細は不明である。605は飾り金具である。I区1面検出時に出土した。楕円形で長径2.25cm、厚さ1.6mmを測る。606は耳搔きである。

1010(近世)から出土した。柄の先端部は欠損し、現状で長さ3.2cm、先端幅4.3mmを測る。607~609はキセルでいずれもSE1071の井筒から出土した。607は内側に径7.8mmの竹状の木質が残る。

(4) 鉄製品(第39図602~604) 鉄片は多く出土した。多くが鋸で膨らんでおり遺存状態が悪い。福岡市立埋蔵文化財センターでのX線による観察の結果は釘が多く、その他に先端を輪状にした金具が多く出土した。602は鍵である。I区焼土面~2面間掘下げ時に出土した。鋸で膨らんでいるので詳細は不明であるが長さ約12.5cmを測る。603は刀子である。SK1065から出土した。604は棒状鉄製品である。長さ5.7cm幅1.2cm、厚さ3~4mmを測り、片方に円形の孔が開く。鐸の舌か。

(5) 土製品 I区北側の黒色土・白色砂互層(11世紀末頃)から鍋取手の取付金具の鋳型が出土した。(第40図610)。鋳型は縦6.4cm、幅5.0cm、最も厚いところで1.4cmを測る。製品は縦5.4cm、幅3.8cmで鍋本体に付く部分は1~2mmと薄い。鋳型は淡茶褐色を呈し、部分的に黒色を呈す。湯口や合せ目の印らしき切り込みがあることから本来合せ型と考えられるが、片面のみで製品が製作可能であることをや、鋳型が全体的に反っており、もう片方と合わせるのが困難であるなどの疑問点がある。そのため未使用品ではと思われたが、表面に見られる白色の粒を埋蔵文化財センターで分析したところ、白い部分だけではなく、鋳型全体で銅を検出した。

(6) ガラス製品(611) I区の第3面検出時に出土した小玉である。径は1cm弱で水色を呈す。

4. 小結

12世紀前半頃と思われる埋立て層とその上の黄褐色整地層を確認した。埋立て土の下は海成砂らしき白色粗砂と動植物遺体や土器を含む薄い暗茶褐色土の互層で、それがSX3046を覆う。黄褐色整地層中では20~30cmごとに遺構の掘り込みがみられ、一回の埋立てはその程度の厚さであったと思われるが、整地層と同時期の遺構は、小さめの井戸を1基確認した他は小型の柱穴が散漫に分布するのみで倉庫のような大型柱穴や土坑はみられない。荷揚げ場のような広場として利用されたのであろうか。埋立て前のSX3046からは多量の動物遺存体とともに木片も多く出土している。その中には箸も多くみられるが、鼻繰りと思われるものや、槍鉤により削られた木片が多く出土しているのは、聖福寺古園の浜辺で作業する大工達を思い起させる。その後連続と遺構が出土するが、中世後半から近世になると井戸が集中して築かれるようになる。ただI区北側は周囲が近世の遺構に取り囲まれているにもかかわらず、近世の遺構がみられないのは何らかの規制があったのであろうか。

本調査地点周囲は11世紀後半から港の機能が沖ノ瀬に移るまでの間、船着き場があったと考えられているが、今回の調査では石垣、護岸等の港に結びつくような遺構は確認できなかった。整地層より下層の白色砂互層と暗褐色埋立土からは玉縁口縁白磁碗が多く見られるが、埋立て後の遺構からも完形の玉縁口縁白磁碗が出土しており、これらが輸入・使用されていた12世紀前半頃に埋立てが行われて陸地化している。整地層はI区の東端からII区中央部まで続いており、その間は一度の埋立てによるものと考えられる。II区西側は遺構に切られており整地層がどこまで続くのか今回の調査では明確にできなかったが、敷地西端にいたトレンチでは整地層は確認できず、12世紀前半の埋立て部は調査区の西端部にあった可能性が高いと思われる。また埋立て前の海岸線は本調査区より東側であるが、北側隣地の14次調査区で出土した白磁の一括廃棄が荷揚げ時に、割っていたものを海中に投棄したものと考えると岸からそう離れていたとも思えない。海岸に面した荷揚げ場等には大勢の人が集まり市なども設けられていた可能性は高い。出土した動物遺存体の多くには解体痕があり、食用にされたと考えられるが市の賑わいのなかで食べられたのではないだろうか。

博多遺跡群第176次調査出土の動物遺存体について

176次調査からは多くの動物遺存体が出土した。動物遺存体の多くは発掘調査時に気がついた大型の骨であるが、骨が多く出土した遺構や井戸の最下層は土壤をサンプリングして水洗選別も行った。出土した動物遺存体は現在まだ整理中で詳しい報告ができないため、後日整理終了後に報告する機会を持ちたい。

176次調査で出土した動物遺存体は哺乳類がウシ、ウマ、イノシシ、シカ、イヌ、ネコ、ウサギ、ネズミ類、イルカ類、鳥類がニワトリ?、キジ、魚類がサメ類、マダイ、チダイ?、フグ類、貝類がカキ、ハイガイ、ハマグリ、ツメタガイ?、爬虫類がスッポン、両生類はヒキガエルと多種にわたる。もっとも多く出土したのは哺乳類のウシ、ウマ、イノシシ、シカである。ヒトも若干出土しているが刃傷などは見られない。埋立て土による紛れ込みか、死体遺棄かは不明である。

動物遺存体が多く出土したのは11世紀後半から12世紀前半に埋立て及び整地が行われる前の海岸の窪み（人為的な掘り込みである可能性がある）であるSX3046や同じく海岸辺の海成堆積である白色砂層や黒色土層などである。SX3046の覆土である暗茶褐色土は全体に植物質を含み、箸や下駄、鼻繩、建築材などの木製品とともに多量の動物遺存体が出土した。出土した種としてはウシ、ウマ、イノシシ、シカ、イヌの大型～中型哺乳類が多い。出土部位はウシやシカの頭蓋骨、下頬、肩甲骨、四肢骨、肋骨が多く椎骨の出土は少ない。シカやウマの指骨など肉としての利用価値が少ない箇所も出土している。解体痕はナタ状の厚みのある刃で骨を切断するものと、筋を切り離す時に付いた細い線状の二通りがあり、これらは遺存状態が悪くて観察不可能な骨を除いた多くの骨で観察できたことから、SX3046から出土した獸骨は皮や肉を利用するために解体された後に廃棄されたものである。この中にはシカやウマの中手骨や中足骨、ウマの脛骨など骨角器の材料として利用されることが多い部分も数多く出土しているが、いまのところ切断痕など骨角器として利用した痕跡はみられない（後述するように他の遺構からは出土している）。また骨にはイヌやネズミによる咬痕が見られることから、解体後直接海に投棄されず、一時期陸上に放置されていたものと思われる。その他にはI区整地層中からもウシ、シカの骨が多く出土している。その中には完形のウシの肩胛骨と土師皿が一緒に出土しており、整地時の祭祀である可能性を考えられるものもある。その他に大型のネズミと思われる上腕骨が出土しており、これが骨に付いた咬痕の主であると思われる。井戸から多くの動物遺存体が出土しているがSE1045（14～15世紀）の井筒からはカエルの骨（上腕骨、橈尺骨、椎骨、寛骨、大腿骨、脛腓骨）など全身の骨がまとめて出土した。寛骨や脛腓骨などから少なくとも2匹分を含む。種は現生資料がないため不明であるが、寛骨全長が4.36cm、脛腓骨全長が3.27cm、大腿骨全長が3.05cmと大型で、ヒキガエルの可能性が高いと思われる。博多遺跡群からのカエル類の出土は珍しいが、立地が海に面した砂丘上で真水が乏しく、塩分が強いことから自然に生息していたのではなく、持ち込まれた物と思われる。漢方ではヒキガエルの目の後からである白色の分泌物が蟾蜍と呼ばれる強心剤として使われているが、切り傷などの塗り薬としても利用されており、薬用もしくは食用として利用されたと思われる。イヌは整地層下の海成堆積層から出土した。解体痕がある骨もあり、食用にされている。イルカ類はSE1071（近世）から橈骨か尺骨と思われる関節部が、またII-1区最下層ドベ（11世紀末）からはナタ状の刃物痕がある骨片が、1053（14～16世紀）からも同様に切断された橈骨が出土している。その他2075（12後～15世紀）から頭骨片、2074（15～16世紀）から尺骨が出土している。イルカ・クジラ類は博多遺跡から多く出土する骨で、他の調査区では14世紀以降になると出土する動物遺存体の大半をイルカの椎骨が占める場合もあり、一つの土坑から数個の椎骨が出土することが多い。今回の

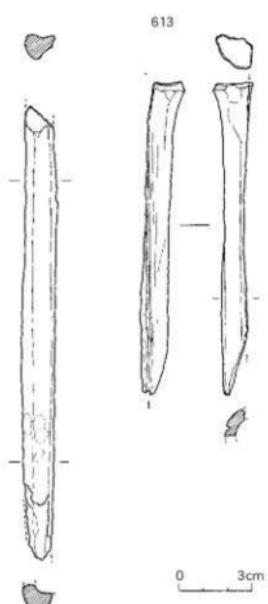
調査ではイルカ類の出土が少ないので、11世紀末から12世紀前半の遺構が多いことが主な原因の一つではあるが、14世紀以降の土坑や近世の井戸もあるにもかかわらず、そこからもほとんど出土していない。また、出土部位に椎骨が少なく頭蓋骨と腕の骨であることも特徴的である。ネコは1面検出面から上腕骨が、Ⅲ区の1～2面掘下げ時に下頸骨が出土している。上腕骨には遠位側に切痕らしきキズがあり、食用にされた可能性が高い。11世紀末から12世紀ごろとするとイエネコとしては古い出土である。貝類の出土は少なく、また小片のため同定できない物が多い。カキは殻長が2～3cmの小型である。これも一つの土坑からまとめて出土することが多いが、本調査区では現在1053（14～16世紀）から右殻が1点出土したのみである。

爬虫類はスッポンが出土した。2066・2067とⅢ区北側黒色土・白色砂互層、Ⅲ区白色砂層の3箇所から背甲骨板が出土した。博多遺跡群から出土する数少ない淡水域に生息する動物である。

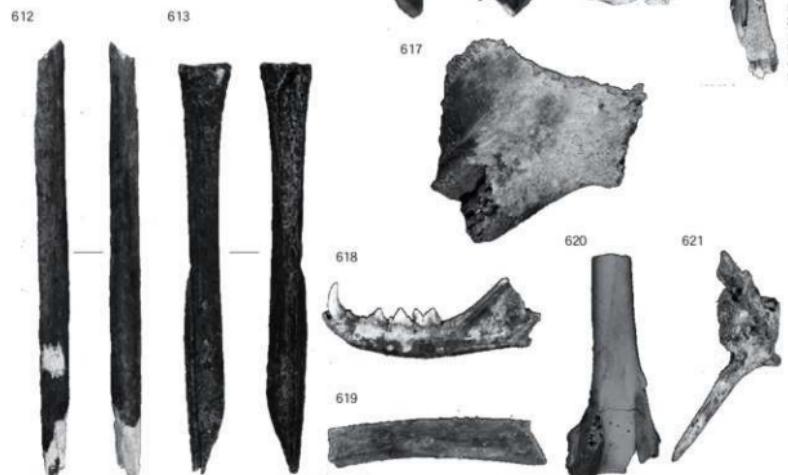
魚類は多く出土しているが現生標本がないため、ほとんど同定できていない。同定できたのはマダイ（1053から前上顎骨、1056井筒から前頭骨と上後頭骨、主上顎骨、1071井筒最下層から出土の角骨、2065から後上頭骨、Ⅲ区1面で前上顎骨、II-1区1～2面掘下げ時に上後頭骨など）、クロダイ（SX3046から前鰓蓋骨）、チダイの可能性がある背鰭2棘（1056井筒）、サメ類（1～2面掘下げ、1048、2075）、ツノザメ（2072から背鰭棘）、フグ類（1004、1045、I区2～3面掘下げ）等である。このうちサメ類の椎骨は博多遺跡群から最も多く出土する魚類であり、イルカ同様一つの遺構から数個の椎骨が出土することが多いが、本調査区での出土数は少ない。マダイは頭部をぶつ切りにしてアラ鍋にした痕跡が多くの中世遺跡から出土しているが、今回の調査でも1056井筒から出土した前頭骨は右側しかなく兜割にされた可能性がある。フグ類は多く出土する魚類であるが今回の調査でも多く出土している。

骨格器 骨格器の原料も含めて2点出土した。612はⅢ区白色砂層（11世紀末～12世紀）から出土した棒状の骨格器である。両端を破損しており現状で18.5cmを測る。脛骨もしくは中手・中足骨を4分割して切断面を整形しているが緻密質の厚さが7mmと厚くウシ・ウマの骨と思われる。SX3046からほぼ同じ大きさの棒状木製品が出土しているため完成品と思われる。613は2061（13～14世紀）から出土した骨格器の材料でシカの中手骨である。中手骨の前面の瘤みと側面にV字型の切り込みをいれて4分割しようとしたが前面が切り込みを逸れて側面側に割れたため廃棄されたものである。これまで博多遺跡群から出土した骨格器の材料では長軸に直交する切断面は鋸を使用し、長軸に沿う切断は切り込みを入れずに割る例が多い。613と同様に切り込みを入れてから割る例は62次（シカ中足骨）や165次（シカ中手骨）の例がある。これは中手・中足骨の両側面に切り込みをいれて前後に2分割しようとしたものである。62次や165次の切り込みは直線でないため、鋸ではなく先が尖った棒状の鉄器で切り込みを入れたと推測したが、613の切り込みは直線状であるため、切り込みをいれるのに鋸を使用したものと思われる。614はシカの中足骨である。中心から左右に割れしており、骨角器材料である可能性はあるが、切断痕はない。615はウシ桡骨、616はシカ中足骨である。615・616も骨角器として使用されることが多いが、本調査区では利用せず廃棄されたものが多い。617はシカ頭蓋骨である。角を利用するため角座の下をナタ状の刃物で切断している。618はネコ下頸である。619はウシ・ウマの肋骨である。このように5～10cm前後で切断されて出土することが多い。620は鳥類の大腿骨遠位端である。下端部だけが黒く焼けており、焼き鳥にしたことが判る。621は魚類椎骨である。椎体の後半が切断されており、胴部をぶつ切りにしたものと思われる。

176次調査では多くの動物遺存体が出土したが、他の調査区との大きな違いはイルカ類の出土がないことである。これは同様に他の調査区で多く出土するサメ類の椎骨が少ないと関連すると思わ



第41図 骨角器実測図 (1/2)



れ、陸生哺乳類を盛んに食べていた時期には大型の魚類を積極的に捕獲する必要がなかった可能性がある。また骨格器は2点のみの出土であるが、613のシカの中手骨は4分割使用しているのが特徴である。この幅では笄に加工するには細すぎるため、他の製品を製作する予定であったと考えられる。また162も大きさは異なるものの、同様に4分割してから加工しており163と同様の技法で分割されたと考えられ、材料の種や時期差があるとはいえ、技術的な繋がりが伺える資料である。

遺構一覽表



1. I区1面（西から）



2. I区2面（西から）



3. I区1～2面間焼土検出面
(西から)

図版2



1. I区3面（西から）



2. II区1面（東から）



3. II区2面（東から）



1. III区1面（南西から）



2. III区2面（南西から）



3. III区3面（南西から）

図版 4



1. SK 1007 遺物出土状況（東から）



2. SE 1045（北西から）



3. SE 1045 土層（北から）



4. SE 1052（南西から）



5. SE 1052 竹筒痕検出状況（南西から）



6. SE 1068（南西から）



1. SE 1071 挖方（南西から）



2. SE 1071 井筒完掘（北東から）



3. SE 1071 井筒内遺物出土状況（南西から）



4. SE 1073 (南東から)



5. SE 2068 井筒 東から



6. SE 2068 桶内側銅錢出土状況

図版 6



1. SE 2075 (南東から)



2. SE 2075 井筒 (南東から)



3. SE 2075 井筒桶断ち割り



4. SE 2075 井筒箍 (西から)



5. SE 2080 (南から)



6. 埋め戻し風景



1. SE 3043 土層（西から）



2. SE 3043 完掘（西から）



3. SK 1002 完掘（南から）



4. SK 1002 土層（西から）



5. SK 1004（東から）



6. SK 1010 土層（西から）

図版8



1. SK 1013 (南東から)



2. SK 1022 (南から)



3. SK 1027 (南東から)



4. SK 1043 (南から)



5. SX3046出土馬下顎



6. 黒色土出土シカ下顎



1. SK 1053・SK 2067・SE 2068土層（南東から）



2. SK 1057（南西から）



3. SK 1066（西から）



4. SK 1074（南から）



5. SK 2035（南から）



6. SK 2035遺物出土状況（東から）

図版 10



1. SK 2048 土層（東から）



2. SX 2053 南から



3. SK 2067 (南西から)



4. SK 2081 (南から)



5. SK 2084 (南西から)



6. SX 3044 (北東から)



1. I区3面礫出土状況



2. I区ベルト焼土ブロック整地層（西から）



3. I区ベルト土層 北西から



4. I区ベルト土層



5. I区ベルト東側焼土ブロック整地層 西から



6. I区北壁土層東側 南東から

図版 12



1. II区北壁西侧下層



2. SX 3046 イヌ寛骨出土状況



3. SX 3046 黒褐色土（北から）



4. SX 3046 黒褐色土上面足痕断面



5. SX 3046 西壁土層（北東から）



6. SX 3046 土層（北西から）



1. III区埋立土下馬下顎出土状況



2. SK 3046遺物出土状況 北から



3. SK 3046黒褐色土遺物出土状況



4. SK 3046黒褐色土獸骨出土状況



5. SK 3046人骨出土状況



6. SX 3048出土下駄

図版 14



1. III区埋立て土下ウシ頭蓋骨出土状況



2. III区埋立て土下獣骨出土状況（西から）



3. III区埋立て土下馬骨出土状況（西から）



4. 入口部確認トレンチ（北西から）



5. 木板 (SX3046)



6. 鉋削り層 (SX3046)

報告書抄録

書名	博多131
副書名	第176次調査報告
卷次	131
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号1	第1043集
編集著者	屋山洋 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会
作成法人ID	40134 発行年月日 2009年3月31日
郵便番号	810-8621 住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話番号	092-711-4667
所収遺跡名	博多遺跡群第176次
ふくおかんふくおかしあかたくてんやまち	
所在地	福岡県福岡市博多区店屋町135、136
コード	市町村 40131 遺跡番号 020127
北緯	33°35'42" 東 経 130°24'34"
調査期間	20070816~20081115 調査面積 207.9m ²
調査原因	事務所の建設 種別 集落
主な時代	中世／近世
主な遺構	井戸 9基、土坑 多数、溝 6条、柱穴 多数、整地層
主な遺物	土師器、須恵器、黒色土器A・B類、瓦器、白磁、青磁、染付、中国陶器 朝鮮陶器、国産陶器、瓦、土製品、土錘、石錘、石製品、ガラス製品、 金属製品、鉄滓、炉壁、木器、獸骨、骨角器

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1043集

博多131

—第176次調査報告—

2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2-13-29